狩人が色んな少女と戯れるだけの話

きのこの山　穏健派

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

狩人が色んな少女と戯れるだけの話です。
獣狩りに疲れた狩人には
これぐらいの休息が
必要だと思いました（小並感）
獣も上位者も冒涜クソ犬も出ません。
興味ない方はブラウザバック推奨です。
また本作はリクエストに
応じて投稿しますので
活動報告にてお待ちしてます。

目次

第１話　心優しき泣き虫 ―― 1
第２話　花言葉の意味 ―― 5
第３話　素晴らしい医療者 ―― 9
第４話　壊れた墓守の少女 ―― 15
第５話　暗闇に咲く花 ―― 26
第６話　絶望の淵に佇む ―― 33
第７話　この出会いに血の導きを ―― 50
第８話　牢獄からの解放 ―― 56
第９話　御令嬢のひと時の楽しみ ―― 65
第１０話　上位者からの贈り物 ―― 70
番外編　ある２人の少女の未来 ―― 87

第1話　心優しき泣き虫

あなたは普通の人だ。
いや、正確には普通の人間だった。
血の医療を求め、ヤーナムへと赴き、青ざめた血という輸血を受けたあなたはなんやかんやで狩人になり、獣を狩ったり、人を狩ったり、上位者を狩ったりｅｔｃ・・・
え？普通の人間は、なんやかんやで初手殺戮はやらない？何言ってるんだ？これぐらい（ヤーナムでは）常識だぞ??
ごほん、とにかく目につくものを片っ端から殺していたら、月の魔物を殺して上位者となった。
今や普通に上位者の幼年期を迎えた。
しかしながら、あなたの姿はいつも通りの人間のそれである。
何故ならばあなたは狩人だからだ、人も獣も上位者もすべてあなたの獲物である。
狩りを全うせよ。森羅万象の如く、血を求めるのだ。
え？やっぱりヤベー奴じゃないかって？さっきから何を言ってるんだ？これぐらい（ヤーナムでは）普通だし常識中の常識だぞ？大丈夫？啓蒙いる??

さて、どこまで話したっけ？

ああ、そうだ。さぁ今日も狩人は張り切って憎き冒涜クソ犬を狩り殺しに行く為、冒涜聖杯ダンジョンに潜ろうとして腐った内臓やらカビやらを用意していると突然共鳴する小さな鐘が鳴り始めた。
これから聖杯に潜ろうとしたにも関わらず、いきなり呼びつけてきた愚者に狩人は少し苛立つが呼ばれた瞬間に惨殺すれば問題ないし多少スッキリするかと思ったので、召喚されてあげた。ただの八つ当たりである。
言い忘れていたが狩人は仲間思いである。ただ助けた直後、殺しにかかるが。

無論、殺されたとしても相手が再起不能になるまで何度も侵入し追い詰め続け殺しに行く。狩人は執念深いのだ。
狩人はどんな奴が相手になっても大丈夫なようにガチガチに固め(但しチート野郎は除く)、いざ出陣。

「・・・・・・・」

召喚され、まず目の当たりにしたのは辺り一面の花畑そして年端もいかない少女だった。髪は金髪ショート、服装は白いワンピース。如何にも純真無垢(むく)という言葉が当て嵌まる。
幼女・・・ リボン・・・ 豚・・・ 下水・・・・
うっ頭が。狩人の啓蒙が1上がった気がする。同時に発狂しそうになった。慌てて鎮静剤(ちんせいざい)を取り出し一気に飲み干した。
危ない危ない。まさか召喚された瞬間、発狂して帰還(きかん)するなど、恥晒(はじさら)しもいいところだ。

「あ、あの」

花畑で鎮座(ちんざ)していた少女がオドオドしながら話しかけてきた。
ふむ。容姿は見たところ、人間としては優れているのだろうが星の娘に比べると何か物足りない。やはり啓蒙か(違うそうじゃない)。
所詮は啓蒙なき獣同然の人間の感性で〝美しい〟だろう。
それにしても敵は何処で誰なのだ、早く殺させろとあなたは少女に問いかける。

「こ、ころすなんてダメだよっ!」

狩人の殺害宣言に少女は涙目になりながらも狩人を止めようとする。
ところで話は変わるがいきなり目の前に現れ殺戮(さつりく)衝動が抑えられない狂人に出会うと人はどうなる?しかも片手には血塗られた凶器

を持って。
普通は泣き叫びながら逃げるか本能が意識を夢の彼方へと飛ばすのだろうが、目の前の少女は涙目になるだけで済んだのだ。これはもしや啓蒙が高いのでは？（絶対違う）
ふむ。敵もいないのに呼ぶとは一体どういう了見だ？場合によっては即内臓攻撃も辞さない。少し殺気を放った狩人がそう言うと少女は何のことか分からないと泣き出した。
「ヒック、しらないよぉ～。ヒック」
殺気を引っ込め、狩人は慌てて少女に泣き止むようにお願いした。側から見ると不審者が幼女を泣かした絵面である。これは事案＆通報不可避。
少女が泣き止まず、何か良いものがないかとポーチを漁ると真っ赤なブローチが出てきた。
確か、これは噴水近くに住んでいる娘が言っていた母親のブローチの筈だ。何故自身が持っているのかと疑問が出てきたがあることを思い出した。
そういえば娘にまだ返していなかった。狩人は偶に忘れがちなのだ。神父を倒し、ブローチを拾った後、そのまま聖堂に殴り込みに行ったのだ。大聖堂に美しい獣がいると啓蒙が囁いたのだ。狩人はうっかりさんである。
未だ泣いている少女に狩人は真っ赤なブローチを付けてあげた。狩人は慈悲深く心優しいのだ（但しデスサンタ、てめーは駄目だ）。
「グスン、これは？」
これは私からのお詫びだと狩人は謝罪した。よくよく考えれば初対面。しかも少女に殺気を放ちながら話しかけるとはやる事が獣そのものであったからだ。
確かに狩人は血に酔っているかどうかと言えば、応であるが獣になる程ではなかった。
真っ赤なブローチを手渡された少女は泣き止み、少し涙ながらも手で拭き取りながら笑顔で狩人を許した。
「グスッ・・・ いいよ。その代わり、一緒に花冠（はなかんむり）つくって！ あっちの

方にきれいなお花があるの!!」
少女に袖を引っ張られ、付いていく狩人。その場面をゲールマンがみたら、自身の子を見る親のような目で笑っていただろうか。
さて、狩人は本来ならさっさと帰って冒涜ダンジョンに潜っていただろうが、偶にはこういうのも悪くない。児戯(じぎ)とて、楽しまなければ損である。
こうして狩人と少女は僅かなひと時であったが花冠作りに没頭(ぼっとう)したのだ。

第2話　花言葉の意味

あなたは普通の狩人だ。
そこら辺にいる一般的な普通の狩人だ。
青ざめた血という輸血を受けたあなたはなんやかんやで狩人になり、毎日毎日、獣を狩ったり、人を狩ったり、上位者を狩ったりｅｔｃ・・・・
一般的な狩人と同じ生活をして暮らしていた。
そしてあなたはコンビニ感覚で、月の魔物を殺して上位者となった。
今や普通に上位者の幼年期を迎えた。
しかしながら、上位者の幼年期を迎えても姿は一般的な狩人のままだ。
何故ならばあなたは狩人だからだ、人も獣も上位者もすべてあなたの血となり肉となり力となるのだ。
狩りを全うせよ。阿修羅（あしゅら）の如く、血を求めるのだ。
さて、今日の狩人はルドウイークを栗本チャレンジしに行く為、輸血液やら獣の丸薬やらを用意していると突然共鳴する小さな鐘が鳴り始めた。
前回と合わせて、これで2回目だ。これから栗チャレしようとしたにも関わらず、いきなり呼びつけてきた獣に狩人はまたか、と少し苛立つが呼ばれた瞬間に初手大砲ブッパすれば問題ないし多少スッキリするかと思ったので、召喚されてあげた。ただのストレス発散である。
言い忘れていたが狩人は慈悲深いのだ。最後は、殺しにかかるが。
無論、殺されたとしても相手が失踪するまで何度も侵入し追い詰め続け殺しに行く。狩人は常に殺意ＭＡＸなのだ。
さて、狩人はどんな奴が相手になっても大丈夫なようにガチガチに固め（但しチート野郎は除く）、召喚されてあげた。

召喚され、まず目の当たりにしたのは一面緑の広い平原だった。空は明るく晴れ、草は優しい風に揺られていた。
不意に人気がし、下を見ると、年端もいかない少女が座っていた。髪は銀髪セミロング、服装はロリータ（某国のアリスのような感じ）。如何にも穢れを知らない純粋な少女という言葉が当て嵌まる。
幼女・・・リボン・・・豚・・・下水・・・・
うっ頭が。狩人の啓蒙が1上がった気がする。同時にデジャブを感じたが、まあ2度あることは3度あるとも言うし、気にしないでおいた。

「おじさん、だあれ？」

座っていた少女がゆっくりと立ち上がり、狩人をジーッと見ながら話しかけてきた。
ふむ。啓蒙なき獣同然の人間の感性で言えば、”美しい〃ではなく”綺麗”だろう。

「おじさん、もしかしてたびするひと？」

目をキラキラと輝かせながら聞いてくる少女。正確には狩人なのだが、まあ確かに色んな所に行って殺しまわっている為、否定は出来なかった。
あなたは少女の問いに肯定すると少女は興奮気味に何処を旅したのか、其処に何があったのかと数々の質問を聞いてきた。
今回は素手のままで呼ばれたこともあり、特に不審がられず、泣かれることがなかったのは幸いだろう。
それはそれとして、あなたは少女に自身が体験してきたことを話した。
例えば、医療協会はヤベー奴しかいないことや宇宙は空にあること、ビルゲンワースの神秘、豚と冒涜（ぼうとく）クソ犬は絶許、初見で聖職者の獣と神父を栗本チャレンジで殺してみせた啓蒙高い狩人がいること

等々・・・・・

気付けば、日が暮れそうになるほど長く語った。これ程まで長く誰かに語ったのは久方ぶりだ。

そろそろ戻るか。あなたは少女に元いた世界に戻ると伝えると少女は涙目でしがみ付いてきた。

「やだやだ！　もっとおじさんのおはなしききたい!!」

少女に泣き付かれ、どうしようかと考えたあなたはポーチからあるものを取り出した。

「・・・・なあにこれ？」

あなたは少女にこれは『狩人呼びの鐘』だと言い、続きが聞きたかったら、これを鳴らせば来てやると説明した。

何故少女に狩人呼びの鐘を渡したのか。それはこの少女に狩人の素質があるからだ。あなたの話を聞いても一度も発狂しなかったのだ。常人なら少し聞いただけで発狂する筈なのに。

そんな訳でこの少女は背後から豚を数百回ほど掘らせれば立派な狩人になると見込んだのだ。狩人は慈悲深く面倒見がいいのだ。（但しノミ人間、テメーは駄目だ）

「うん！　わかった！　じゃあね、おじさん!!」

少女に手を振りながら、元の世界に戻ったあなたは栗本チャレンジの準備の続きをし始めた。

ふと、ポーチに身に覚えのない感触があり、取り出してみると白い一輪の花が入っていた。おそらく、別れ際に少女がこっそり入れたのだろう。

それにしても、この白い花は何というのだろうか。あなたは愛する人形ちゃんにこの白い花は何という名前か聞いた。

「これは・・・ダリアですね。花形や花色の豊富さから花束などに利用されると聞きます」

どうやら、この白い花の名前はダリアというようだ。ひとまず、空の鎮静剤を花瓶がわりにし、人形ちゃんの横に飾った。

「・・・・フフッ」

人形ちゃんが何故か微笑(ほほえ)みながら花を愛(め)でているのが気になったが、とりあえず、あなたはルドウイークを栗本しに行った。

２１時間後、栗本チャレンジ失敗したあなたは連盟長に応援を頼み、ルドウイークをボコボコにしたのはまた別の話。

第3話　素晴らしい医療者

あなたはごく普通の狩人だ。
目に付くものすべて殺しまわっている一般的な狩人だ。
詐欺師めいた老人に青ざめた血という輸血どころかヤベー物を受けたあなたは気が付けば狩人になり、騙(だま)した老人を見つける為、獣を狩ったり、人を狩ったり、上位者を狩ったりｅｔｃ・・・・
普通の被害者狩人として暮らしていた。
そしてあなたは腹いせで、月の魔物を殺して上位者となった。
今や普通に上位者の幼年期を迎えた。
しかしながら、上位者の幼年期を迎えても被害者なのは変わりない。
何故ならば、まだあなたを騙した老人を見つけていないからだ。あなたは力をつける為に人も獣も上位者も、目につくもの全てを殺しまわった。だが、それでも足りない。
狩りを全うせよ。憎き老人を殺害すべく、血を求めるのだ。
さて、本日の狩人の予定は輸血液と水銀弾が少なくなってきた為、教室棟(きょうしつとう)の学徒(がくと)マラソンする準備をしていると突然共鳴する小さな鐘が鳴り始めた。
これで3回目だ。最近、呼ばれる回数が多いと感じてきた。これまでは呼ばれても週に1度あるかないかぐらいだったのだが、このところほぼ毎日呼ばれている。
これからマラソンしようとしたにも関わらず、いきなり呼びつけてきた愚か者に狩人はまたか、と溜息を吐くと同時に困惑していた。先程も言ったが、毎日呼ばれるのは本当に珍しいのだ。
話が逸れてしまったが、まあ、呼ばれた瞬間にガトリングでハメ殺しすれば問題ないし多少の息抜き出来るかと思ったので、召喚されてあげた。ただの自己満足である。
言い忘れていたが狩人は欲深いのだ。つまるところ、助けた後は殺しにかかるのだ。
無論、殺されたとしても相手がサヨナラグッバイするまで何度も侵

入し追い詰め続け殺しに行く。狩人は常に修羅(しゅら)なのだ。
さて、狩人はどんな奴が相手になっても大丈夫なようにガチガチに固めようとしたが、前回とまた同じかも知れないと推理し、神父装備を着用し、素手のまま、召喚されてあげた。

召喚され、まず目の当たりにしたのは何処かの医療部屋だった。窓から見える空は明るく晴れ、雲は柔らかい風に吹かれ少しずつ移動していた。
背後から扉の開く音がし、振り向くと、年端もいかない少女がいた。髪は白髪ポニーテール、服装は医者のコートを着ているが少しブカブカであった。如何にも医者の助手もしくは弟子という言葉が当て嵌まる。
医療協会・・・ビルゲンワース・・・脳・・・瞳・・・
うっ頭が。狩人の啓蒙が2上がった気がする。同時に、何故か頭の中でロマくんが出てきたが、すぐに振り払い、平静を保とうとした。

「・・・・おじさん、ここで何してるの?」

ドアの近くで少女が不審者をみるような目で話しかけてきた。それもそうだろう、なんせ狩人の今の状況は不法侵入した不審者だからだ。
ふむ。それにしても、啓蒙なき獣同然の人間の感性で言えば、〝美しい〟ではなく〝綺麗〟でもない・・・〝可愛い〟というものか。

「・・・・おじさん、何が目的なの」

そう言うと、あなたを警戒している少女はドアを閉め鍵を掛けた。どうやらあなたをここから逃す気はないようだ。
あなたは少女の問いに気付いたら此処にいたと説明するが疑いは晴れなかった。

だが、素手のまま召喚されてあげたことでまだ大事にならずに済んでいるのが不幸中の幸いだった。
さて、あなたはどうすれば少女の疑いを晴らせるか案を考えていると、あることを思い出した。
あなたは医療協会の手によって、青ざめた血を輸血されたことを。
そして、一つの考えが浮かんだ。
もしかしたら、青ざめた血を治せるのではないかと。
あなたは少女に自分を治療して欲しいと頼むと、少女は先程と打って変わって表情が笑顔になった。

「なーんだ、そうなんだ。なら、おじさんを治療してあげる！」

そう言いながら、少女はあなたの診断の準備をし始めた。あなたは少女に対して、そう簡単に警戒を解いていいものかと疑問に思ったが、青ざめた血を治してくれそうなので黙っておいた。

「えーとそれじゃ、おじさんのびょーきを調べたいから血を取らせて？」

少女は採血器を手にし、腕を捲るよう、言った。あなたは血を抜き取られる行為に苦手意識があったが、青ざめた血を治せるなら多少は我慢する必要があった。
渋々、あなたは腕を捲り、少女に採血された。血が抜き取られる感覚にトラウマが蘇る。ある時はナメクジ人間に啓蒙を吸われ、ある時は劣化ヘム魔女に忍殺され、またある時は虫人間に発狂殺されｅｔｃ・・・・
あなたは啓蒙が３上がると同時に発狂した。幸運にも体力ミリ残しで留まった。

「・・・・うーん、おかしいなぁ。全然反応しないなぁ。これであってるはずなのに」

どうやら少女はあなたを治療するのに集中していた為、あなたが発狂したことに気付かなかったようだ。

「・・・・ところでおじさんのびょーきってどんなの？」

少女に聞かれたあなたは詐欺師めいた老人に騙され、青ざめた血という輸血をされたことを話した。青ざめた血を輸血されて以来、以前よりも身体が頑丈になったことや大怪我をしても輸血をすれば治ること等を話した。

それを聞いた少女は少しばかり考えるとあなたにこう言った。

「それなら別におじさんのびょーき治さなくてもいいんじゃない？」

そう言われたあなたは怒りたかったが、少女の言っていることが正しかった為、何も言えず、少し落ち込んだ。

落ち込んだあなたを見て少女は慌ててあなたを励ました。

「え、えーとえーと・・・で、でもおじさんすごいよね！　だって怪我とかすぐ治っちゃうんでしょ？　ならおじさんの血を他の人に分けてあげれば、その人もすぐに治るんじゃない？」

遠回しにお前の血を寄越せと聞こえるが少女に悪気はなかった。そもそも少女は言い方はアレだが純粋にあなたのことを励ましていたのだ。少女に悪気はなかった（大事なことなのでｒｙ）。

治せないことが分かるとあなたは元の世界に帰ると少女に伝え、ドアの鍵を開け、扉を開こうとしたがいつの間にか近くまで来ていた少女に服の裾を掴まれていた。

「おじさん・・・なおせなくて、ごめんなさい」

少女に涙目でそう言われたあなたは目線を少女と同じくらいに合わせるようにしゃがみ、少女の頭を撫でた。
あなたは少女に謝らなくても大丈夫だと言った。何故なら全部の病気が治せる程、医療が発展していないと。

「・・・・・」

それでも少女の表情が暗く、どうすればいいか考えたあなたは、少女が病気を治そうとしたことに礼を言った。

「で、でも・・・・おじさんのびょーき、なおってないし・・・かんしゃされることじゃ・・・・」

突然、礼を言われた少女は困惑し、あなたの病気を治せていないと言うが、それでも治そうとしてくれたことに感謝していると少女に伝えると、少女は涙を拭い取り、笑顔になった。

「そっか・・・ねぇ、おじさん。わたし、もっともっと勉強しておじさんのびょーき治してあげる！　だから約束して？」

そう言うと、少女はあなたにゆびきりをしようと右手の小指を出した。
別に約束する程でもないと思ったが折角の好意を無駄にする訳にもいかず、あなたは少女と約束を交わした。

「ゆびきりげんまん、嘘ついたら針千本飲ーます！ゆびきった!!」

嘘ついたら針を千本飲まされることになると知ったあなたは少し身震いした。

「じゃあ約束だからねおじさん！」

少女に別れを告げたあなたは元の世界に戻った。そしてあなたは少女との約束を破らないようにしようと心に誓った。

なんせ、針を千本飲まされるからだ。それならまだ裸で冒涜クソ犬と戯れた方がマシだった。

ひとまず、元の世界に戻ったあなたは輸血液と水銀弾マラソンを始めたが途中で飽きて、月の魔物を殺しにいったのはまた別の話。

第４話　壊れた墓守の少女

あなたは一般的な狩人だ。
ヤーナムでは誰もが知っている狩人だ。
ひょんなことから、あなたはヤーナムに訪れ、ご老人に医療を施されたのだが気が付けば狩人になっていた。
そして色々あって月の魔物を殺して上位者となり、上位者の幼年期を迎えたものの姿が相変わらず人間のままだ。
それもそのはず、まだあなたは青ざめた血を輸血した老人を見つけていないからだ。とりあえず、あなたは目につくもの全てを殺しまわった。人も獣も上位者も。だが、それでも足りない。
獣狩りを全うせよ。行方を眩(くら)ました老人を探し出すべく、生きるもの全てに死(救済)を与えるのだ。
さて、そんな本日の狩人の予定は愛用のパイル君のお手入れだ。長年使ってきたパイル君はもはや恋人同然だ（但し人形ちゃんほど及ばないが）。気を付けて手入れをしなければ。あなたは最後の仕上げに取り掛かろうとしたが突然共鳴する小さな鐘が鳴り始めた。
まただ。しかも今回は呼ばれるのが早い。前回呼ばれてからまだほんの2日しか経っていない。
しかし今日は聖杯マラソンや輸血液マラソンなどをする予定はなく、パイル君を手入れし終わった後は何をしようかと考えていたところだ。
というわけで召喚されてあげることにした。少しくらいは暇つぶしになると思ったからだ。まあ本当のところは話す(殺し合い)相手が欲しかったのだ。流石にずっと人形ちゃんとでは迷惑を掛けると思ったからだ。
言い忘れていたが、呼び出された瞬間に殺されたとしても相手が命乞いするまで何度も侵入し追い詰め続け殺しに行く。狩人は常に最初からクライマックスなのだ（某仮面騎手並感）。まあ仮に命乞いしたところであなたは無慈悲に殺すだけだが。

さて、狩人はどんな奴が相手になっても大丈夫なように装備を整えようとしたが、前回とまた同じかも知れないと本能が囁いた為、今回はヤマムラ装備を着用し千景を携えて、召喚されてあげた。

召喚され、まず目の当たりにしたのは何処か森の中だった。
禁域の森・・・ ヤーナムの影・・・ 潜影蛇手(せんえいじゃしゅ)・・・ 大蛇丸(おろちまる)・・・・
うっ頭が。狩人の啓蒙が上がった気がする。同時に、頭の中で顔が青白いどころか肌が白く、蛇に似ている男が出てきたが、すぐに振り払い、平静を保とうとした。というか、誰だ？ 知り合いにそんな人物はいなかったはずだが。
まあそれはそれとして、だ。ふむ、どうやら召喚位置がズレたのか。そう考えたあなたはとりあえず森の奥へと進んでいった。
それから数十分後、あなたは切り開かれた場所に出た。小さい山小屋がポツンと建っており、その少し離れた場所に墓石のようなものがあった。
一見、無人の山小屋と思ったがあなたは墓石を見て、あることに気付いた。
墓石に束になった花が置いてある。それもまだ時間は経っていない。つまり、ここに訪れている者もしくは住んでいる人がいるのだ。
しかし、あなたは一つ疑問が浮かんだ。
ここに訪れている、もしくは住んでいるのが本当に人なのか。アデラインのように頭が肥大化した獣かもしれない。ここはひとまず離れた方が良いかと考えたあなたは墓石から立ち上がり離れようとしたその時

「・・・・誰？ ここで何してるの??」

突然背後から声を掛けられ、あなたは咄嗟に千景(ちかげ)を抜き相手の首元に当てた。
あなたは全く気配を感じ取れなかった＝猛者(もさ)と判断したが、予想は

大きく裏切られた。
背後にいたのは、年端(としは)もいっていないであろう少女だった。髪色は小麦のように明るく綺麗で肩にかかるほど伸びていた。服装は黒いワンピースに死んだ蝙蝠(こうもり)の翼のようにショオルを身に着けていた。雰囲気は暗く、まるで死人かと思うほど目が濁(にご)っていた。
あなたは少女の首元に当てていた千景を納め、謝罪した。突然、知らぬ人間から殺されそうになったのだ。怯(おび)えさせてしまったと思っていたのだが、少女はあなたの顔をジッと見つめていた。

「・・・・・嘘」

そう言うと、少女はあなたの身に着けているシルクハットを取り、あなたの顔を覗き込んだ。

「・・・・・・・・やっぱり、やっぱりそうだ」

少女は両手であなたの顔を包み、抱きしめた。
突然、少女に抱きしめられたあなたは混乱していた。一体何故？
そう疑問が生じたが、それはすぐに解けた。

「私を置いて死ぬわけないですよね。○○○(好きな名前を入れてね)さん、ずっと一緒に居てくれるって約束しましたもんね。ああよかった、ほんとうに、グスッ、ほんとうによかった。ヒック」

どうやら少女はあなたを○○○という人間と勘違いしているようだ。あなたは人違いだと言おうとしたが雰囲気的に言えるはずもなく。そのまま受け入れてしまった。

「グスッ・・・・すいません、嬉しくて、つい。そうだ！　わたし○○○さんの為にたくさんお料理を練習していたんですよ？　ふふっ、やっとわたしの手料理を振る舞えますね。ほら、家に入りましょ」

あなたは成すがままに山小屋の中に連れていかれ、木のテーブルへと座らせられた。どうにかして人違いだと言いたいが一体どうすればいいだろうか。そう考えていると、あなたの目の前に続々と料理が運ばれた。

「少し作りすぎちゃったかな。でも、結構お腹空いてるでしょ？　これくらい食べられるよね??」

ふむ。テーブルを埋め尽くす程の料理を食せと言うのか、この少女は。まあ残さず食べるが。

あなたは手を伸ばし、出された料理を一つずつ食べていった。

「どう・・・？　おいしいかな・・・・？」

味覚がないから何とも言えないが、あなたは美味しいと少女に伝えると少女は顔を綻ばせた。

流石に味覚がないから味など分からん、などと言えないし言う気もない。ましてや、幼い少女を悲しませるなど獣以下になるつもりはない。

そしてあなたは何とか全ての料理を平らげることができた。もうこれ以上は流石に無理だ。食べ終わり、手を合わせ、少女に礼を言うと少女は笑顔であなたに微笑みかけ、空になった料理を片付けていった。

「はい、ご馳走様でした。少しゆっくりしていてください。お皿洗いますから」

そう言うと、キッチンへと行きカチャカチャと皿を洗う音が聞こえてくる。

さて、どうしたものか。今のうちに人違いであるということを考え

なければいけないのだが・・・・中々いい案が浮かばなかった。
いや、浮かぶには浮かぶのだが、どれもこれも結果的に少女を傷つけ悲しませてしまうものばかりだ。どうにか少女を悲しまさせず人違いであることを言いたいのだが・・・・これといって良い考えが浮かばなかった。
すると、皿を洗う音が鳴り止みキッチンから少女が帰ってくるとあなたの隣に座り手を絡ませてきた。

「ふふっ、こうするのも久しぶりですね○○○さん」

あなたの肩へと寄り添い、更に腕も絡ませる少女。

不味(まず)い。非常に不味い。

先に言っておくが性的興奮を抑えられなくなるというものではなく、人違いだということが言えずらくなってマズいと言っているだけで別に少女から発する匂いに我慢できず襲ってしまうというものではない。そこだけは勘違いしないでほしい。

「あ、あの・・・・○○○さん」

すると隣にいる少女が顔を赤らませながら、あなたに話しかけてきた。

「その・・・・今日の夜、い、一緒にその、寝てもいいですか?」

どうやら少女はあなたと同じベッドで寝たいようだ。外を見れば、陽が沈み周りは暗くなっていた。
もうそんなに経っていたのか。視線を窓からあなたの隣でモジモジしている少女に目を移し、あなたはこのままでは少女に人違いだと言い出せなくなると暫し考えた。

「ダメ・・・・ですか？」

・・・・・・・いや後で考えよう。今はこの少女を悲しませぬよう努めよう。そう考えたあなたは了承（思考放棄）し、少女と共にベッドへと潜った。

「少し狭いですね／／／」

・・・・・背中合わせで寝ているからでは？

そう思ったが口には出さなかった。だが確かに少し窮屈だ・・・・そうだ。

「え？　キャッ」

あなたは少女の方を向き、身体全体で包み込むように抱きしめた。これならば大丈夫だろう。

「あ、あの」

どうかしたか？　これならば問題ないだろう??

「そうですけど・・・・その」

？・・・・ああ、成程。大丈夫だ、私は何処にも行くつもりはない。

「え・・・・・」

約束しよう。君が寝た後も私は何処にも行かないと。だから安心して眠ると良い。

「・・・・・」

少女は何か言いたげであったがあなたの胸へと顔を埋めると、それ以降喋らなくなったが少女の身体は震えていた。まるで泣いているかのように。

少女が黙ってから数十分・・・・いや数時間経ったかもしれない。少女はあなたの胸から離れると蚊の鳴くような声でポツポツと話していった。

本当はあなたが〇〇〇ではないということを。にもかかわらず、あなたを〇〇〇と呼び、騙していたことを。

「本当は・・・・本当はあなたが〇〇〇じゃないのは知っていました。でも、あなたと〇〇〇が似ていて・・・・死んだのは嘘で生きていたんじゃないかと・・・・ごめんなさい、ごめんなさい」

どうやら最初からあなたが〇〇〇ではないことを分かっていたようだ。だがあなたと〇〇〇が生き写しのように似ていた為、あなたを〇〇〇と思い、振る舞ってしまったようだ。

「迷惑・・・・でしたよね」

少女が涙目で申し訳なさそうにあなたを見つめる。

確かに最初はそう思ったが、少女の気持ちは痛いほど分かる。親しい人を失うのは苦痛だ。私も何人も失ってきた。だからこそ、途中から少女のいう〇〇〇になろうとしたが無理があった。謝るべきは此方の方だ。

「・・・・優しいんですね」

そんなことはない。ただ私が勝手にやったことだ。

そう言うと少女は顔を伏せ、あなたの胸へと再び顔を埋めた。すると少女は顔を埋めながらあなたにあることを懇願してきた。

「お願いがあります・・・・わたしを・・・殺してくれませんか」

・・・・・・・・何故・・・・何故、そのようなことを。

そう聞くと少女は自身の身体はもう後、数週間しか生きることができないと明かした。病に身体を蝕(むしば)まれながら死にたくない。どうせなら愛する人の手で死にたいと。

・・・・・・・・・・・・そう、か。

「・・・・・ごめんなさい。少し、おかしいことを言いました。忘れてください」

・・・・・・構わない。介錯(かいしゃく)してやろう。

「・・・・・・え」

ただ少し準備が必要だが・・・・手伝ってくれるか？

「・・・・・・・・・・・ほんとうに、いいんですか」

ああ。

「・・・・っ、はい」

あなたはベッドから起き上がり、外へ出ると墓石の隣に穴を掘り始め、少女はベッドのシーツを剥がし取り外へと持ち出した。ようやく獣が掘り起こさないほどの深さまで掘り終わり、いよいよ少女の介錯の準備ができた。

「・・・・ふふっ」

どうした？

「いえ、これから死ぬというのに実感が湧かないというか」

・・・・・・怖いか？

そう少女に問うと、少女は首を振った。

「恐怖はありません。ただ・・・・・」

ただ？

「・・・・短い人生だったな、と」

そう呟くと少女の目元から一筋の涙が零れ落ちた。

・・・・・・今ならまだ間に合うぞ

あなたは少女に問いかけると少女は目元を拭い、あなたへと身体を向けた。

「大丈夫です・・・・もう覚悟は出来ています」

・・・・・・そうか、では始めるぞ。
あなたは地面に広げたシーツの上に少女を座らせ、千景を抜刀し少女の首元に当てた。痛みなく、一瞬で終わるように集中し始めようとしたが少女が最後の願いを言ってきた。

「最期に・・・・わたしに、キスをしてくれませんか？」

・・・・・・・私は○○○ではないぞ。

「分かっています・・・・それでも、お願いします」

・・・・・・・・わかった。
あなたは少女の頬に手を添え、唇を重ねた。一瞬。たった一瞬であったがその時だけはまるで全ての時が止まり、長く感じた。唇を少女から離すと何事もなかったかのように再び座り、あなたに身を任せた。

「・・・・・・じゃあ。お願いします」

・・・・・・・・・・。
千景を少女の首元に当て、全神経を集中させる。
少女に一切の苦痛を負わせることなくするために。
そしてあなたは千景をゆっくりと上げ・・・・

「May（貴公に）blood（血の）protect（加護があらんことを）you・・・・」

降り下ろした。

とある木こりの話

なあ、知ってるか？　ある森の中の切り開かれた場所に今は無人となった山小屋と2つの墓石があるらしい。1つはかなり長い年月が経っているが、もう1つの墓石はまだ出来てから新しいんだ。

え？　だからなんだって??　まあ落ち着けって。でだ。普通ならあんなとこ誰も行かないだろ？　けどな、誰かがあそこに行ってわざわざ花を添えてるらしいぜ。変な物好きもいたもんだな。

第5話　暗闇に咲く花

あなたは模範的（もはんてき）な狩人だ。
ヤーナムでは、あなたの名を知らぬ者はいないほど有名な狩人だ。
少し風邪気味（かぜぎみ）だったあなたはヤーナムに訪れ、腕がいいと噂（うわさ）されていた医療所に入り、ご老人に医療を施されたのだが気が付けば青ざめた血を勝手に輸血され狩人になっていた。
しかも風邪は治っていなかった。
ブチ切れたあなたは勢いで月の魔物を殺して上位者となり、上位者の幼年期を迎えた。
だがあなたの怒りは収まらなかった。むしろ大きくなっていった。
それもそのはず、まだあなたは青ざめた血を輸血したヤブ医者（老人）を見つけていないからだ。ひとまず、あなたは目につくもの全てを殺しまわった。人も獣も上位者も。全てはあなたを騙したヤブ医者（老人）を塵も残さぬようにする為に。
だが、それでも足りない。
獣狩りの夜を全うせよ。あなたを騙（だま）し姿を消したヤブ医者（老人）を探し出し殺すべく、力をつけるのだ。
さて、そんな本日の狩人の予定は花壇のお手入れだ。普段は使者君たちに任せきりであったが、やることが特にない時は使者君たちと一緒にお手入れをしていたのだ。一通り花壇の手入れが終わり、あなたはついでに工房を掃除するかと考えたが突然共鳴する小さな鐘が鳴り始めた。
またか。しかし前回呼ばれてからちょうど今日で1週間ぐらい経つのか。今回は少し遅かったな。
そんなことを考えながらあなたは着々と準備をしていた。工房を掃除するのはあなたを呼んだ獣を掃除してからだ。
言い忘れていたが、呼び出された瞬間に殺されたとしても相手が紐なしバンジーするまで何度も侵入し追い詰め続け殺しに行く。狩人は常に闘争を求めるのだ。ところでＡＣの新作はまだ？
さて、狩人はどんな奴が相手になっても大丈夫なように装備を整え

ようとしたが、前回とまた同じかも知れないと推測し、今回は教会の狩人（黒ｖｅｒ）を着用し仕込み杖を携えて、召喚されてあげた。

召喚され、まず目の当たりにしたのは床に可愛らしいぬいぐるみが散乱している部屋だった。窓から見える空は暗く、嵐のような雨が吹き荒れていた。

すると背後から布が擦れる音がし振り向くと、ベッドの上に寝間着を着た白髪の少女がいた。

ガスコイン神父の娘・・・ 豚・・・ 血に濡れたリボン・・・・

うっ頭が。狩人の啓蒙（けいもう）が上がった気がする。そしてあなたは再度豚は絶対に許さんと決意した。

「・・・んう、だれかいるの？」

少女は目をこすりながらベッドから起き上がり、周りを見渡す。そんな少女の顔を見たあなたはあることに気付いた。

目に包帯が何重にも巻かれていた。少女の小さな顔の半分を埋めるほど。

もしや盲目（もうもく）なのか？　そう考えたあなたはゆっくりと少女に近付き、顔を覗き込んだ。

ふむ。目に何らかの怪我もしくは異常が起きたのか。そう考察したあなたは少女の目がどうなっているか気になり少し包帯をズラそうと手を伸ばした瞬間、少女があなたの腕を掴んだ。

「・・・・おじさん、さっきからなにしてるの？」

・・・・・・・いきなり腕を掴むのは驚くからやめてほしい。
どうやら少女はあなたの存在に気付いていたようだ。しかし何故この少女はあなたの存在に気付いたのだろうか。
「わたし、目は見えないけど・・・・ 白いけむり、っていうのかな？ それが見えるから何処にいるのか何となくわかる」
少女は何故あなたの存在に気づいたのか、少し首を傾(かし)げながら話した。
どうやら、この少女は無自覚であるが心眼を習得しているようだ。少し鍛えさせれば立派な狩人になること間違いなしだろう。まるであなたのように。
「けど、おじさん・・・・ ほかの人と違う。 ぱぱとまま、お医者さん達なら白いけむりなのに・・・・ おじさんは赤くて、暗い」
・・・・・そうか。やはりこの身は、もはや人あらざるものか。
それもそのはず、あなたは『人』ではなく、『上位者』という存在に昇華したのだ。まあ、その前に青ざめた血を輸血された時点で人をやめてしまっているが。
とはいえ中身が上位者になろうが獣になろうが外見は変わらず人である為、特に何も問題はない。それどころかメリットしかない。
まず、どんなに重傷を負ったとしても獣を殴るか輸血液を注射すれば、あら不思議。即座に回復するのだ。
そんな訳であなたは特に気にしていないのだが、目の前の少女からは哀(あわ)れみや同情の念を感じた。
「・・・・大丈夫だよ、おじさん。 おじさんがわるい人じゃないって、わたし分かるから」

そう言い、少女は掴んでいたあなたの腕を離し、かわりにあなたの手を小さな手で包みこんだ。小さいながらも温かみを感じる。まるで子をあやす母のような温かみを。

「実はね‥‥‥　わたしもそうなんだ。　ほら」

少女がぬいぐるみに手をかざした瞬間、ぬいぐるみが宙に浮いた。少女が手を回せば、ぬいぐるみも回転する。素晴らしい。この少女は心眼だけでなく、神秘も習得しているようだ。やはり将来有望だ。ご両親は、さぞ喜んでいるだろう。

「そんなこと、ないよ‥‥‥」

あなたは称賛したが、少女はそう思っていないようだ。現に声が少し震えている。このような力を持っているなら普通は誰もが喉(のど)から手が出るほど欲しい人材であるはずだが。

「前にね‥‥　ぱぱとままが喧嘩しているの聞こえて‥‥　それでね、その話がわたしをどうするかって言ってて‥‥‥‥　わたしが、ばけものだって」

ベッドのシーツをギュッと掴みながらポツポツと話していく少女。どうやら少女の両親は良く思っていないようだ。

「それで、わたしを何処かに閉じこめるか‥‥‥　遠いところに1人で居てもらうかって‥‥‥」

少女の顔に何重にも巻かれた包帯の隙間から滴が垂れ、頬をつたりシーツへと落ち染み込んでいく。

「もう、ひとりになるのはイヤだよ‥‥‥」

声だけでなく小さな身体も震え始め、次第に幾つもの滴が垂れ落ち、点々とシーツを彩っていく。
あなたは可哀想であるがどうすることも出来ない為、どうしたものかと考えていたが何を思ったのか、ポロッと口に出してしまった。

・・・・・では私の所に来るか？

あなたは慌てて口を塞ぐが時すでに遅し。少女はあなたの顔をジッと見つめた（包帯で見えないが）。

「ッ・・・・・・・、でもわたし迷惑かけちゃう。　だって、ばけものだって言われて・・・・」

言ってしまったのは仕方ないと後に引けなくなったあなたは言葉を続けた。
・・・・・そもそもの話であるが私だってそうだ。それも貴公以上に。それに、だ。私のいる所はそんなけもｎ・・・・・　人間だらけだ。1人増えたとて何も起きやしないし変わりもしない。
・・・・・もし貴公が良ければ、私と共に来るか？

あなたはそう話し、少女に手を差し出した。
周りから化け物と蔑まれ1人で過ごし（暗闇の中に閉じ込まれたままでいるか）一生を終えるか、あるいは（暗闇から抜け出すか）あなたと共に来るか。
それを決めるのは少女次第だ。

「・・・・・わたしは」

とある鴉羽の狩人の話。

はあ、今度は何だいアタシだって忙しいんだよ…… って、アンタは確かアイツのサンドバk…… 友人かい。 ……話がある？ちょっと待っておくれ。

それで、もしかして話ってのはあの子のことかい。その驚いた顔してるってことは当たりかい。そうさね、あの子は確かアイツ曰く拾ってきたらしい…… 話を聞く限りどちらかと言えば拉致に近いかもしれないがね。

ただまあ、実力は申し分ないしそれどころか私らを超えちまう程の伸びしろがあるさね。注意しとかないとアンタもいつか足元を掬(すく)ちまうよ。

第6話　絶望の淵に佇む

声が聞こえる。
何かを叩きながら、荒げている声が。

「ーーーー！　ーーーーッ!!」

匂いがする。
獣が死に絶えた異臭が。

「ーーーーー！　ーーーー！　ーーーー!!」

面をあげれば、血塗れになった何かが痙攣し、此方に手を伸ばしている。その手は赤黒く変色し、皮膚はドロドロに溶け落ち、僅かな肉の間から白い骨が露出していた。

「ーーーーーーーッ!!!!」

瞬間、暗く錆び付いた部屋に乾いた音が鳴り響く。
穴の空いた胸から流れた血の筋が地面に辿り着き、ゆっくりと血溜まりを作っていく。何かは最後の息を吐いた後、魂が身体を離れていき、事切れた。
皆、何も抵抗することが出来ない虫のように踏み潰されていく。
花の散るが如く、葉の落ちるが如く、一人また一人と相次いで逝ってしまった。
次はわたしの番であろう。
もう全てがどうでもよくなった。
未来が途方もない厚く重い灰色の壁のようにしか感じられない。

もし願いが叶うなら、わたしは楽に死にたい。

―――――――――――――――――――――――――――――

あなたはそこら辺にいる普通の狩人だ。
誰もが畏怖（いふ）する素晴らしい狩人だ。
寝ている間に青ざめた血を輸血され狩人になった後、目があったという理由だけで月の魔物を殺し、上位者となり幼年期を迎えた。
しかし姿は変わらず人のままであった。
それもそうだ、あなたはまだ青ざめた血を輸血した愚か者を天誅（てんちゅう）していないからだ。ひとまず、あなたは目と目があったもの全てを屠（ほふ）っていった。人も獣も上位者も。だが、それでも足りない。
獣狩りを全うせよ。勝手に青ざめて血を輸血した愚か者を見つけ、その身を持って代償を払って貰うのだ。
獣狩りの夜を全うせよ。あなたの許可も無く勝手に青ざめた血を輸血した愚か者を排除するべく、血を求めるのだ。
さて、そんな狩人の本日の予定は先程まで穢れた血を誓約した忌々（いまいま）しい血族（けつぞく）共を浄化（抹殺）しようと処刑隊の服に身を包み、黄金の三角頭を被り、愛用その2の月光を片手に血眼で探し回っていたのだが、気が付けば見たこともない場所に立ち尽くしていた。
あなたの目の前には、木という木に囲まれた森の中に年代を感じる

洋館がポツンと建っていたのだ。
はて？　このような建造物は見たことはないが・・・・
もしや未開拓（新DLC）の地に踏み込んでしまったのか？
そう考えたあなたは辺りを見回すが雑魚敵どころか獣の気配さえ感じられなかった。あなたの休息を求められる灯火さえも。
一度万全に準備してから戻ってくるべきかと考えていた瞬間、微（かす）かな・・・・・蚊の鳴くような音が僅（わず）かにだがあなたの耳に届いた。
発砲音。
音源はおそらく、この屋敷からだ。
となると、やはりこの屋敷に何かあるのか。
そう思考したあなたは屋敷の玄関の前まで来ると月光を振りかざし、ドアを勢いよく吹っ飛ばした。さながらその姿は某機械男を彷彿（ほうふつ）とさせる。
さて、ダイナミック不法侵入及び器物損壊をかましたあなたは屋敷に入ると同時にある匂いを感じとった。
湿気と埃臭い屋敷の空気に微かに硝煙（しょうえん）と血の匂いがする・・・・・そして獣が死に絶えた死臭（ししゅう）も。
やはりこれは何かあると思ったあなたは周囲を警戒しながら屋敷の奥へと踏み入った。
ところで人間という生き物は自分が棲息（せいそく）する家の空気に対して、獣が巣の安全、或は近づいた危険を本能的に嗅ぎ分けると同じような直覚を持っているのは知っているだろうか。
あなたは獣の生気さえも感じられない鎮（しず）まりかえった屋敷、何処からか流れ出てくる冷やかさに用心し一つ一つ部屋を調べ回った。
しかし何処もいずれ埃が被り、生活していた様子が感じられず、あなたはあの音は気の所為（せい）だったのか？と、考えてまた次の部屋を調べるとそこは他の部屋よりもずっと広く、そして違和感（いわかん）を感じた。
床を見れば、本来なら他の部屋と同様に埃を被っているはずがその様子は全く無く、むしろ清潔感を漂（ただよわ）せている。
天井は高くガラス製のシャンデリアが吊るされ、長広いテーブルに幾つもの椅子が側に置かれており、テーブルを挟んだ両隣の壁際には

暖炉（だんろ）が設置されている。どうやらここはリビングのようだ。
それにしては、いささか甲冑（かっちゅう）やら象牙（ぞうげ）やら鹿の剥製（はくせい）やら、その他諸々が飾られ、住人の趣味の悪さをこれでもかと誇示している。
ここの家主はよっぽど感性が悪いのだろう。
あなたは今この場に居ない家主をｄｉｓ（嘲笑）りながら部屋の隅々を探索しようとした瞬間、血の匂いが濃くなったことに気付いた。

・・・・・・ここか。

暖炉の直ぐ近くまで来ると血の匂いは一層濃くなっている。しゃがんで何か手掛かりがないか探して見るとある事に気付いた。
まだ灰が暖かい。
つまり先程までまだ獣がいた形跡である。が、ふと指先に何かが当たった。
灰を掻き分けると小さい鉄板のような物が敷かれており、それを退かすとレバーが出現した。あなたは躊躇（ためら）いも無くレバーを引いた瞬間、暖炉の横の壁が動き出し、地下へと通じる道が開かれた……濃くなった血の匂いと死臭と共に。
あなたは意を決して、松明に火を灯し地下へと踏み入った。
しばらく奥へと進んでいくと後ろから再び暖炉の横の壁が動き出し、道を閉じてしまった。どうやら一定の時間が経つと閉まる仕掛けのようだ。
気にせず、あなたは奥へ奥へと進んでいった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「・・・・・・・・・・んぅ」

いつの間にか私は眠りに落ちていたようだが、
それを妨げるようにコツコツと
此方に向かってくる足音が聞こえてくる。
その音は段々と大きくなっていった。
とうとう私の番が来たようだ。
悔いはない。
そもそも自分の生まれも育ちも知らぬというのに
悔いなどあるはずがなかった。
足音が鳴り止むと私の目前の赤黒く錆び付いた扉が軋みながら開かれた。

「・・・・・・・・・・・・・・?」

だが私の目の前にいる人物はご主人様ではなかった。白くブカブカとした服を纏い、頭に黄金色の三角柱を被っていた。
そのようなお召し物は見たことがなかったが、もはやどうでもいい。なんせ今日で私の役目も終わりだからだ。
三角柱を被ったご主人様が近づいて来る。最初はお仕置きと称した折檻から始まり、奉仕をさせる。いつも通りの行為だ。それが終われば、私も彼らと同じ運命を辿るーーーーー

・・・・・・・貴公、大丈夫か?

ーーーーはずだった。

――――――――――――――――――――――

目の前に現れた錆付いた鉄の扉を開けると、服とは表現できそうにないボロ布を身に纏(まと)った身体中痣(あざ)だらけの黒髪の少女がいた。

血と死臭と生臭い部屋の隅に縮こまり、少し顔を上げ此方の様子を伺っていた。少女の表情からは生気どころか人間性すら無いに等しかった。まるで命令されない限り動かない人形のように。

さて、どうしたものか。

他の部屋にも微かであるが人の気配はある。

が、他の部屋にいる者も目の前の少女のように精神が壊れている者ばかりだろう。

・・・・・面倒だな。

一人一人救出するのはハッキリ言って効率が悪過ぎる。こうなるなら知り合いの狩人を呼ぶべきだったかと今更後悔していると、仕掛け扉が動いた音がした。

不味い。

どうやらこの屋敷の主が戻って来たようだ。

ここは一度準備をしてから来るべきかと判断したあなたは狩人の確かな徴(しるし)を取り出し、狩人の夢に帰ろうとしたが―――

「全く手間取らせせやがってッ！　儂を誰だと思っていやがるんだあの野郎ッ!!」

「まあまあ落ち着いてくださいよ旦那。どうせアイツらも旦那を怒ら

せたこと後悔しますから」
「ああその通りだ。目に物いわせてやるからな!!」
「それはそうと今日もまたあのお気に入りを使うんですかい？」
「勿論。あれは最初は何の役にも立たない屑だが、やはり所詮は女だ。奉仕の一つ二つ教え込めば後はもう最高だ」

――――気が変わった。

――――――――――――――――――――――

「旦那がそんなに気に入ってるなら俺も使ってみたいっすね」

ヘコヘコとゴマを剃(す)りながら機嫌取りを伺(うかが)う私兵に儂のお気に入りを使いたいなどと戯言を言うが、まあ今日は儂も気分が良い。特別に許可してやろう。
「そうかそうか。なら儂が使った後なら構わんぞ」
「ま、まじですか」
「なんだ。儂の後は嫌だと抜かすのか？」

そう睨みを聞かせると首をブンブンと横に振りながら言い訳を並べる私兵。
「い、いやいや、まさか使わせてくれるとは思わなかったもんで」
「ふん・・・・・まあいい。そういうことにしといてやる」

「あ、ありがとうございます」
「いいから、さっさと扉を開けろ」

ったく。どいつもこいつも役立たずのゴミ共が。
心の中で悪態を吐きながら今日はどうしてやろうかと舌舐めずりをしていた瞬間

ビチャッ

仕立て屋にオーダーメイドした気に入っていた服に赤い染料が降りかかった。気に入っていた服を汚され、青筋を浮かべながらブチ切れたーーー

「おい貴様ッ！　儂の高い金を払って作った服を汚すとはどういう了見だ！　貴様らなど儂の服よりも価値もないーーーー」

ーーーー下半身だけとなった私兵に対して。

「ひっ、ひいっ!!」

高い服がどうのこうのと抜かしていた獣は服が汚れるにも関わらず、手に持っていたランプを落とし割り、尻餅を着き後ずさっていた。
開かれた錆付いた鉄の扉から足音が聞こえてくる。

カンッカンッ

同時に金属が地面を叩く音がする。
まるで今日がお前の命日だと言わんばかりに。

カンッカンッ

暗闇の中で時たま火花が散る。
まるで死神が今か今かと鎌を研ぎ澄ますように。
「だ、誰だ!?　ここを何処だとーーー」
「貴公、あの部屋の奥にいた娘はなんだ」
すると目前から声が聞こえてきた。
とてつもない怒りを孕んだ低い声が。
「お、お前は誰ーーー」
「質問に答えろ。あの部屋の奥にいた娘はなんだ」
有無を言わさず自分の質問だけに答えろと
一方的に語りかけてくる。
とてつもない憎悪を孕んだ声が。
「あ、あの屑か!?　あれは儂の領地の屑共の娘だ！　儂を馬鹿にした屑共を公開処刑して儂の奴隷としたてあげた！」
「そうか」
獣の戯言に不快ではあるが耳を傾ける。
真っ二つにした獣の血を拭いながら。
「な、なんだ、もしや欲しいのか？　なら貴様にくれてやーーー」
「そうか」
獣の戯言（ざれごと）に苛立ち、つい両足を切り落としてしまった。ああ、もう限界だ。
「ぎ、ぎゃあああああああッ!!?」
「そうか」

「ままま待て、待ってくれ！　頼む！　金なら幾らでもやる!!」
あなたの目の前に突き出された右腕を切り落とした。
壁に鮮血が飛翔（ひしょう）し赤く染め上げる。
「ぐ、があああああッ!!?」
「そうか」
「まっ、待ってくーーー」
未だに命乞いをする獣にもはや慈悲など与える必要もない。あなたは月光を横に薙ぎ払い、獣の首を飛ばした。
「ーーーーー」
「そうか」
階段から声を荒げながら降りてくる獣共が耳に入る。ああ、獣は全てーーー
「皆殺しだ」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
・・・・・・・・・・い
私の目の前に立つ人が・・・・人のような何かが青く輝く剣を降りながらご主人様を惨殺した後、急いで降りて来た傭兵達が取り囲んだ。

けれど人のような何かは笑いながら、切り掛かって来た傭兵の首を飛ばした後、死体を放り投げ陣形が崩れた瞬間、火炎瓶を投げつけ、傭兵達を火達磨（ひだるま）に仕立て上げだ。

・・・・・・・・・わい

その場から我先にと傭兵達が逃げようとするが人のような何かは嗤（わら）いながら、傭兵達の返り血を浴びながら殺していった。

まるで新しい玩具を買って貰い遊んでいる子供のように。

気が付けば、息が荒くなっている。

身体は震え、両手で耳を抑えていた。

私の中の何かが込み上げてくる。

・・・・・・・・・こわい

分からない。分からないけど。

・・・・・・・・・こわい。いきたい。

今だけは死にたくないと心の底から言える。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

気が付くとあなたはリビングで最後の獣をテーブルに叩きつけ月

光を突き刺していた。どうやら少し血に酔い過ぎていたようだ。
血に酔った狩人は獣だ。そうならないよう、今一度あなたは戒(いまし)めた。
それはそうと監禁されていた少女は無事だろうか。
この屋敷の主を殺した辺りから記憶が曖昧だが少女は殺していない・・・・・はず。
まあ殺ってしまっていたらその時はその時か。
血族の女王が生き返らせることが可能なら少女も生き返らせることができるだろうと謎の根拠を持ちながら確認しにいった。

「・・・・・・・・ッ」

良かった。殺していなかった。
何故か身体を震わせながら縮こまっているが
ひとまず、あなたは安堵を吐くと少女に
手を差し伸べた。

「・・・・・・・・・ひっ」

・・・・・・立ち上がれないだろうと思い、手を差し伸べたら怖がられた。何故だ。
・・・・ああ、そうか。血塗れだからか。
そう考えた(勘違いした)あなたは少女から少し離れ、血を落とし再び手を差し伸べた。

「い、いや」

・・・・・・さっきより怖がられた。何故だ。
・・・・・・もしや匂いか？

そう考えたあなたは処刑隊からヤハグルへと着替えた。匂いは問題ないな。良し。
（違うそうじゃない）
気を取り直し、再度手を差し伸べた。

「こないで」

・・・・・・・・・ブワッ（；ω；）

「・・・・・・・・・・え」

あなたは泣いた。
流石に生理的に無理だと言わんばかりに
拒まれたのは幾ら上位者であろうと辛かった。
着いた血や匂いはなんとかなる。
だが生理的に無理となると全く手の施しようがなかった。
やはり他人と関わると碌なことにならない。
もう信用できるのは人形ちゃんだけだ。
え？知り合いの狩人??
挨拶がわりに毎度殺しに掛かるのは
果たして知り合いと言って良いのだろうか。

「・・・・・・あ、あの」

ああもうやだ。厄日だ。
今日は血族を狩りに来たはずなのに、なんで
喋るデブと理性がある獣を殺して助けようとした
少女に拒まれるのか。
これも全部月の魔物の所為だ。
帰ったら殺しに行こう。そうしよう。

「あ、あの！」

・・・・・・いきなり耳元で話しかけるのは勘弁してもらいたい。

気付けば少女があなたの近くまで寄って
来ているではないか。
もしや生理的に無理というのは嘘だったのでは??
一瞬、思ったが無理してあなたに話しかけていたとなるとなんかこう・・・・ごめん。

・・・・・・・・・・・・帰るか。いや、その前に。

取り敢えずあなたは持っていた人形ちゃんの服と屋敷から拾った金貨の袋を少女に渡した。

「も、もらえません・・・・こんなにたくさん」

・・・・・やはり無理して話しかけていたようだ。さっさと帰ろう。

あなたの匂いが着いた服に関しては目を瞑(つむ)ってもらいたい。流石に年頃の娘をそのような格好で居させるのはどうかと思い、そんなに匂いが着いていない人形ちゃんの服を渡したのだが少しでもあなたの匂いが着いた服は嫌なようだ。
これ以上、心が傷つく前に帰ろう。
そう判断したあなたの行動は早かった。
少女に好きに生きろと伝えるや否や
狩人の確かな徴をポーチから取り出すと
少女から急いで離れ、狩人の夢へと
帰還した。そして人形ちゃんに抱きついた。
急いで離れた際に少女が何か言っていたが
気にしないでおこう、その方が身のためだ。

それはそうと剣の狩人証を何処かに落として
しまったが……　まあいいか。
どの道もう使わないものだから。

とある女領主とメイドの小話

「○○様、此方の書類は纏め終わりました」
「うん、ありがとう」
「それはそうと○○様」
「ん？」
「先日の舞踏会、また断ったようですね」
「あー、そりゃだってやる事があるし」
「そうですか……　やはりお見合いは断ったということですか」
「は、はははは」
「誤魔化さないでください」
「はい……」
「はぁ……　私から言うのも何ですが、そろそろ結婚を視野に入れた
方が良いかと思われます」
「い、いや結婚はまだ先でいいかなって、ね？」
「……○○様のおっしゃっていたあの方と結婚したいので

すか?」
「ななななんのことかなー」
「・・・・・何度も言いますが○○様のおっしゃってる方は私達からしたら唯の狂人の他なりませんが」
「狂人って・・・・・ 言い過ぎだと思うんだけど」
「○○様からしたらお伽話(とぎばなし)の騎士様のようですが第三者から見れば人殺しが好きな犯罪者ですよ」
「・・・・・・・・・・・・・」
「すいません、少し言い過ぎましたね。ですが」
「うん、分かってるよ」
「・・・・そうですか。それでは私はこれで」
「お疲れ様」

一人取り残された少女・・・・ いや女性は席を立ち、窓際へと歩き出した。今夜は雲一つない綺麗な満月だ。

「犯罪者、狂人か」

『好きに生きろ』

「それでも私はーーー」

首に掛けている真ん中に小さい緑の宝石が埋め込まれた十字架のネックレスを握りしめる。生きる希望をくれたあの人は今何をしているのだろう。
また私のような人を何処かで救っているのか。
あるいは人殺しをしているのだろうか。
例え、周りから犯罪者、狂人、化物などと何と言われようとこれだけは心の底から言える。

「ーーーーあなたをお慕いしています」

いつまでも愛してる、と。

第7話　この出会いに血の導きを

あなたは誰もが知っている普通の狩人だ。
存在するだけで獣共が首を差し出し
慈悲を乞うほど、普通な狩人だ。
少し調子が優れなかったあなたは『今だけ無料で診断します』と書かれた看板が目に入り、タダほど素晴らしいものはないと碌に疑いもせず、診療所へと向かい理性がない獣でも分かるほど胡散臭い詐欺師めいた医者に診断してもらっていたのだが、途中で突然の睡魔に襲われ寝てしまい、気が付けばあなたは勝手に青ざめた血を輸血され狩人になっていた。
青ざめた血を輸血され狩人になった後、気の赴くままに散策し、ついでで月の魔物を殺し、上位者となり幼年期を迎えた。
しかし姿は変わらず人のままであった。
それもそのはず、あなたはまだ人の許可を取らずに勝手に青ざめた血を輸血した愚かな獣を処刑していないからだ。取り敢えず、視界に入るや否や全てを狩っていった。人も獣も上位者も。だが、それでも足りない。
獣狩りを全うせよ。人の許可も取らずに勝手に青ざめて血を輸血した非常識な獣を見つけ、五体満足では済まされない程の罰を与えるのだ。
さて、そんな狩人の予定は血が穢れているという理由だけで血族狩りを行う万死に値する愚な処刑隊共を一匹残らず滅殺すべく、血の女王に敬意を表し近衛騎士のカインの兜を被り、血の女王を前に優雅に振る舞うべく頭から下は騎士装備へと着替えた。
そして最後に自身は血の女王の武器であると宣誓すべく、レイテルパラッシュとエヴェリンを携えて処刑隊共を駆逐しようとしたがーーー

「・・・すう・・・・・すう」

目覚めの墓石に寄り掛かり、スヤスヤと寝ている少女がいた。
月のような青白い短髪に整った顔立ち、羽衣(はごろも)のような透(す)けた水色のネグリジェを身に付けていた。

・・・・・何故こんな場所にいるのだろうか。

ここはあなたを含めた狩人達の憩(いこ)いの場。
夢の避難所。又の名を〝狩人の夢〟。
世界の全てと繋がっているが、場所が何処にあるのかも分からない狩人の夢の世界だ。
そう『夢』の世界なのだ。
まぁ正確には悪夢なのだが。
話が逸れてしまったが本来なら我々(あなた)のような輩(上位者)しか来れないはずなのだが、部外者もしくは関係者ではない少女がいるのだ。
簡単に言えばネットにも存在していない場所に訪れている感じだ。
それはさておき、あなたは如何(どう)したものかと首を傾(かし)げ考え込んだ。
念の為、言っておくがあなたは少女に手をかける趣味はない。場合にはよるが。
かといって、ここに住まわせるのもどうかと思うのだが・・・・ 出来れば元いた場所に帰らせたい。
そんなことを考えていると、少女の目が覚めたようだ。小さな口で大きく欠伸(あくび)をすると周りを見渡した後、あなたと目が合い、ずっとこちらを見ている。
まだ完全に目が覚めていないのか蕩けた目であなたを隅々まで見ると、あなたに向かって両手を広げた。

「・・・・・・・だっこ」

唐突(とうとつ)に自身を抱えろと言われたあなたは困惑(こんわく)したが、言われた通りに少女の脇の下に手を入れ抱き上げた。

「ん」

すると未だに寝ぼけているのかあなたが抱き上げると、少女は両手をあなたの首に回しギュッと抱き着いた。そして、目を閉じるや否やまた夢の世界に行ってしまった。

夢の世界にいるのに夢の世界に

いくとかギャグか何かで？

しょうもないことを考えながらあなたはひとまず、今日の予定は止めにし少女が起きるのを待つことにした。

とはいえ、ただただ待つのは忍びない。

取り敢えず、ここ最近していなかった掃除を使者くん達とする事にした。少女を抱えながらも何とか空いている手で掃いていると、いつの間にか少女の目が覚めていた。

少女は使者くん達がワチャワチャと一生懸命に

掃除しているのを眺めていた。

もしや混ざりたいのでは？

そう思ったあなたは少女を下ろし手に持っていた箒(ほうき)を半分ぐらいに折り、折れて尖(とが)った先端を丸く加工し、少女に手渡して『あそこにいる使者くん達と仲良く掃除しておいで』と言うと嬉しそうに頷き、使者くん達と掃除していった。

どうやらあなたの予想は正しかったようだ。

使者くん達も今日は楽しそうに掃除している。

偶(たま)には、こうありたいものだ。

さて、少女と使者くん達が掃除している間にあなたは盆水(ぼんすい)から水を汲(く)み取り、花に水やりを始めた。この花に水やりが意外と大変なのだ。なにせ範囲が広く、水が無くなればまた汲みに行かねばならないのだ。

とはいえ別の使者くん達と共同作業の為、数十分で終わることが出来た。もしこれを1人でやろうものなら半日は潰れるだろう。
さて、一通りやることをやったあなたは片付けを終え、少女の様子を見に行った。何かしら起きてないといいのだが。

「んしょ……　こうやるの？」
「イェア」

・・・・何も問題なかったようだ。現に少女は使者くん達と花冠(はなかんむり)を作っているようだ。ワチャワチャと少女に教えながら作る様はまるで兄妹のようだ。
しかし花冠か……　あの泣き虫の少女は元気だろうか。あの少女もまたこの子のように何処かで花冠を作っているのだろうか。
そう物思いにふけているとズボンの裾(すそ)をクイクイと引っ張られていることに気が付いた。

「ん……」

いつの間にか、あなたの側まで来ていた少女は先程作り終えた花冠をあなたに見せていた。はじめてながらも上手く作れたようだ。

ーーーー上手く出来ているな。
「……　しゃがんで」

少女にそう諭(さと)されたあなたは少女と同じ目線までしゃがみ込む。すると少女は手に持っていた花冠をあなたの頭の上に載せた。

ーーーーこれは？
「プレゼント……　きにいった？」

この花冠はどうやらあなたの為に作ったようだ。嬉しく思ったあ

なたは少女の頭を優しく撫でた。

ーーーーそうか。ありがとう。

「えへへ……　ねぇ、あのおねぇちゃんは？」

少女が指差す向こうには、あなたの愛する人形ちゃんが此方を見ながら微笑んでいた。人形ちゃんはあなたと少女の戯(たわむ)れを母親のように見守っていたようだ。

ーーーーああ、あれは人形ちゃんだ。

「？……　おにんぎょうさんなの？」

ーーーーそうとも。ご挨拶(あいさつ)しようか。

あなたは少女の手を取り、人形ちゃんの側(そば)まで移動した。

「えと、こんにちは」

「こんにちは。可愛いお客様」

「・・・・・おにんぎょうさん？」

「はい。私は人形です」

人見知りなのか少女はあなたの背に隠れながら人形ちゃんに話しかけた。人形ちゃんは少女に優しく微笑(ほほえ)みながら、少女と同じ目線にしゃがみ手を差し出した。

「大丈夫ですよ。怖がらないでください」

「・・・・・・」

恐る恐る少女は人形ちゃんの手を取り、ゆっくり握ると人形ちゃんも少女の手を怖がらせないよう優しく包み込んだ。

安心したのか少女はあなたの背からお人形ちゃんの目の前まで移動して人形ちゃんを見つめた。人形ちゃんもまた微笑みながら少女

を見つめていた。さながら、その姿は我が子を愛する母のようだ。

「おにんぎょうさん？」
「はい。なんでしょう」
「・・・・・おにんぎょうさん」
「はい」
「あの、ね・・・・・ い、いっしょにおはな・・・ つくりたい」
「ええ。構いませんよ」
「・・・・・ほんと？」
「はい」

先程と打って変わって少女は満面の笑みを浮かべ、お人形ちゃんの手を取り、工房の裏へと進んでいった。大方、使者くん達と作っていた花冠を今度は人形ちゃんと作るのだろう。

「わたし、つくりかたおしえるね！」
「はい」

まるで親子のようだ。そう思いながらあなたは人形ちゃんと少女を見送り、愛用の武器達を手入れをし始めた。時々、工房の裏から嬉々とした声が聞こえ、あなたは少女と人形ちゃんが仲良くしているようで何よりだと嬉しく思った。

ーーーーこの時がずっと続けば良いのに。

あなたのこの願(思い)は決して叶うことはないだろうが、それでも今だけは・・・・・・ そう願わずにはいられなかった。

第８話　牢獄からの解放

また駄目だった。

寒い。

もう何度目なんだろう。

暗い。

ぱぱとままに迷惑かけちゃった。

一人はいやだ。

今日もごはん抜きなのかな。

お願い……。

もっとがんばらないと。（誰か…）（たすけて）

――――――――――――――――――――――――

あなたはヤーナム市民１００人中１００人が
知っていると答える程、有名な普通の狩人だ。
暇が有れば、月の魔物を殴りに行ったり、
ある時は、知り合いの狩人を実験材料にする
極々普通の狩人だ。

特に用事もなく、暇だったあなたは偶々通りがかった診断所に目が入り、最近視力落ちてきたし診て貰うかとコンビニ感覚で診療所へと向かい、あからさまに胡散臭(うさんくさ)いヤブ医者に診断してもらっていたのだが、途中で意識を失い、気が付けばあなたは勝手に青ざめた血を輸血され狩人になっていた。

青ざめた血を輸血され狩人になった後、適当に獣に支配されたヤーナム街を散歩し、なんか目の前に現れた自称上位者の月の魔物を殺し、あなたは上位者となり幼年期を迎えた。

しかし姿は変わらず人のままであった。

それもそのはず、あなたはまだ昏睡輸血した抹殺リストＴＯＰにいる獣を処刑していないからだ。取り敢えず、視界に入るや否や全てを狩っていった。人も獣も上位者も。だが、それでも足りない。

獣狩りを全うせよ。あなたを昏睡させ、青ざめた血を輸血した非常識な獣を見つけ、五体満足では済まされない程の罰を与えるのだ。

さて。そんなあなたの今日の予定は知り合いの狩人に連れられ、いつもの装備(ヤーナムの狩人装備＋ノコ鉈＋短銃)で初心者狩人の指導＋護衛をヤーナム市街にて行っていたが不幸にも下水の豚にぶつかり(突進され)底が見えない穴へと吸い込まれてしまった。

まだ1周目の獣共だしへーきへーきと慢心していなければ、あなたは今頃豚のケツを掘っていただろう。されど、時すでに遅し。慢心していた結果がこれだ。

とはいえ、また共鳴の鐘を鳴らせば初心者狩人が死なない限り何度でも戻れる。次からは慢心せずして挑めば良い。

それにしてもやけに豚に突き落とされてから

かれこれ時間が経つが落下が長すぎる。

もしや上位者(バグ)の悪戯か？

そうこう考えていると、真っ暗闇だった一面が反転して明るくなっていた。下を見れば木々が生い茂っており、上を見上げればいつの間にか太陽が出ているではないか。

おかしい。未だヤーナムは夜の筈だ。つまるところ、あなたはまた未探索(新DLC)の地へと迷い込んでしまったのだ。

そして問題が一つある。
気付けば、あなたは空高くにいた。
落下しながらだが。
このままでは地面に激突しミンチになるだろうが、幸いにもカレル文字『獣』のランク3を装備している為、死ぬことはないだろう。とはいえ、上手く着地出来るかは別だが。
そう落下しながら考えていたあなたはそのまま地面に背中から叩き付けられた。ダメージがないとはいえ、一瞬呼吸が出来なくなるのは勘弁して欲しい。
ひとまず、服に付いた土を払おうと立ち上がると目の前にはまだ年期がそれほど経っていないであろう屋敷が建っていた。

前に見た洋館より新しいな。

そう物思いに耽ていたあなたは以前、「生理的に無理」と少女に言われたことを思い出し、泣き出しそうになるが押し留めた。狩人は強い子だから直ぐ泣いてはいけない。
そんなトラウマを思い出しながらあなたは屋敷全体を囲っていた軽く3メートルはあるだろう塀をポーチから取り出した大砲で風穴を空け、屋敷の玄関を教会の石鎚(いしづち)で木っ端微塵にし、破壊の限りを尽くした。
さて、不法侵入及び器物損壊、爆発物取締りなどなど・・・ 知り合いの狩人がこの場に居れば卒倒するほどの問題をしでかしたあなたは気にせず、屋敷の中を探索し始めた。
屋敷の中はまだ人か獣が住んでいるのか、廊下は塵一つなく綺麗に掃除されているのが分かる。
ここまで綺麗に掃除されているなら獣ではないな。
しかし油断してはいけない。
こういうのは大抵、人の形をした獣というのがお約束である。取り敢えず、部屋を一つ一つ虱潰(しらみつぶ)しに確認しながら探索するのが定石(じょうせき)だ。
あなたもまだ若かった頃(初見)は碌に確認もせず奥に進んでいき、結果とし

て獣共にリンチされたのが懐かしく思える。無論、あなたをリンチした獣共は全員内臓を捲き散らしてやったが。
そんなこんなで探索を続けること1時間、特にめぼしい物は無いと悟ったあなたは帰ろうかと狩人の確かな徴を取り出そうとしたその時、小さかったが啜り泣く声が聞こえた。
最初は気の所為かと思っていたが、最上階から階段を降りるにつれ、声が大きくなっていった。声を頼りに進んでいくと、そこは他者を寄せつけんと感じる程の黒光りする鉄製の扉があった。

・・・・ここか。

耳を扉にくっ付けると中から啜り泣く声が聞こえてくる。現状から判断して監禁されているだろうと答えに至ったあなたはパイルハンマーを取り出し、R2溜め攻撃を扉に向かってブッパした。
轟音と共に鉄製の扉はひしゃげ、扉の金具が耐え切れず、吹き飛んでいき壁に叩き付けられた。

・・・・死んでないよな？

まさかここまで脆いと思わなかったあなたは吹き飛んだ扉と壁との間に挟まれてないか、冷や汗を掻いた。

「・・・・おじさん、だれ？」

が、どうやら杞憂に終わったようだ。死んでないと分かるとあなたは息を吐き、周りを確認した。
窓は鉄格子が嵌めており、家具はベッドと机しかなく、とても裕福そうな屋敷と、こと離れていた。まわってみた部屋はどれも高級感が漂(ただよ)い、この屋敷の主は稼ぎが凄いと思わせる程であったが、この部屋だけは質素・・・　いやそれ以外かもしれない。

・・・・まるで牢獄だな。

「・・・・ねえ」

そう考えていると、この部屋の主があなたの服の裾を掴み話しかけてきた。髪はまるで血酒のように赤々としており、目は輝く硬貨のような黄金色していた。身長はあなたの腰ほどまでしかなく、年端もいってない少女であろうが、身体は痩せ細り、顔はやつれ、目元は腫れ、目には光が宿っていなかった。

恐らく、この子の親もしくは屋敷の主の所為だろう。沸沸と湧き上がってくる怒りを隠しながら少女と同じ目線にしゃがんだ。

・・・どうした？

「・・・・・・・」

少女は無言のままあなたを見つめていた。すると少女からクゥと腹の虫が鳴いた音が聞こえた。

「・・・・おなか・・すいた」

・・・・少し待て。

あなたはポーチに何かないか探してみるが果たして少女に食べさせられる物があっただろうかと不安が過るが、何かが手に触れ、取り出してみると以前、狩人の夢に訪れた少女が使者くん達とお菓子なる物を作って、あなたにプレゼントされたことを思い出した。

掌サイズの袋の中には小麦と砂糖を混ぜ合わせ焼いたお菓子が入っていた。確か名前はクッキーだったか。

・・・・ほら。

「・・・・・・」

あなたは取り出したクッキーを少女に手渡すと、少女はもそもそと食べ始めた。美味しかったのか、少女は無言で食べ続けた。

さて、どうしたものか。

以前のように助け出しても良いが今回ばかりは前回とは違う予感がする。長年の培(つちか)ったあなたの経験が警鐘(けいしょう)を鳴らし、待ったをかけていた。

そんな予感が的中したのか、外から少し年若い男とその男の女であろう甲高い怒鳴り声が聞こえてきた。恐らく、この少女の両親だろう。

あなたは少女に私がいることは秘密にしてくれと言うとベッドの下に入り込み姿を隠した。怒鳴り声は段々と大きくなっていき、ドタバタと階段を駆け上がる音が廊下に鳴り響く。

「おい！　これは一体どういうことだ!!」

「部屋中メチャクチャじゃない!!?」

少女の父親であろう男は少女の首元を掴み、乱暴に持ち上げた。自分の娘とは思えない扱いにあなたは激怒するが必死に抑えた。まだこの獣共が両親とは限らない。あなたは隙を伺い、その時を待ち望んだ。

「何か言ったらどうだ!!」

「・・・ううっ」

男は少女の首元を掴んだ手に力を入れ、少女を苦しめた。もういっその事、この獣共をここで殺した方が少女の為になるのでは?と考え

たあなたは短銃をいつでも発砲出来る様準備した。

「ちょっと!?　それ以上したら描けなくなるでしょ！　唯でさえ餌だって碌に与えてないんだから!!」

「ふんっ！」

「・・・・っ！」

父親とおもしき獣は少女を床に放り投げると、少女に目もくれず部屋から出て行った。ケホケホと咳をしながら立ち上がろうとした少女に母親であろう獣は鞄からキャンバスと絵筆、塗料を取り出し、床にぶち撒けた。

「ほらっ！　わざわざ高い金出して買ってきてあげたんだから、もっと金目になるような物を描きな！　さもないとまた餌抜きだよ!!」

「・・・・」

「っ！　なんだいその目は！　何か文句があるなら言いな!!」

「・・・・いえ」

「ちっ」

獣は舌打ちをすると部屋から出て行き、1人少女が残された。あなたは獣が遠くに行ったことを確認するとベッドの下から這い出て少女の安否を伺った。

大丈夫か？

「・・・・・うっ」

やはり耐え切れなかったのか、少女はポロポロと泣き出してしまった。目元から溢れ出た涙は頬をつたり、床に点々とシミを作っていった。あなたは少女を抱き寄せ優しく包み、頭を撫でた。

あなたはとうの昔に我慢の限界を迎えており、少女を慰めた後に獣

共を血祭りにあげることを決意した。例え泣き叫ぼうが命乞いをしようとも地獄よりも生温(なまぬる)い苦痛を味合わせてやる。

「もう・・・やだ。　ぱぱとままがいないところにいきたい」

・・・・・それはここから逃げたいと受け取っていいのか？

あなたは少女にそう告げると少女は顔を上げ、あなたを見つめた。

「・・・・ほんとう？」

ああ。　ここから一緒に逃げようか？

あなたは手を差し出すと少女は目元を手で拭き取り、あなたの手を握った。少女の手はあなたが軽く力を入れてしまえば、小枝のように折れそうであったが不思議にも力強く感じた。

行こうか。

「・・・・・うん！」

そう言うとあなたは窓にはめられた鉄格子を片手で引きちぎり、窓ガラスを破ると少女をお姫様抱っこで抱え、屋敷から飛び出した。

とある新米狩人の話

あ、先輩！　先日はありがとうございました！
いや～色々とご教授頂いてマジ助かりました。
ところでそんなヤツれた顔してどうしたんすか？
え？　アイツがまた問題を起こした??
・・・・ああ！　先輩のことをサンドバｔ・・・・　練習に
付き合ってもらってる方のことすか？
それが何かあったんすか？
・・・また新しい幼女拾ってきた??
あー・・・・　そういえばあの後、うちのとこ来て
ちょっと預かってくれって言った後、どっか行きましたね。
まあ、十数分ぐらいで戻ってきて幼女抱えて帰りましたけど。
それにしても何で血塗(ちまみ)れだったんすかね？
？　どうしたんすか頭なんか抱えて？
え？　急用が出来た??
ちょっ!?　今日この後、一緒に地底潜るって
言ったじゃないですか!?
また後で？　えっちょっ先輩!!?
・・・・行っちゃったよ。

第9話　御令嬢のひと時の楽しみ

あなたは知り合いの狩人が１０人中１０人が常識が通じない普通の狩人と口を揃えて言うほど、特に何の問題もない、そこら辺にいる一般狩人だ。

暇が有れば、後輩の狩人の育成を行ったり、

ある時は、知り合いの狩人に止められながら

時計塔のマリア様にセクハラしに行ったりする極々普通の狩人だ。

長期休暇を貰い、ヤーナムを観光中だったあなたは腹痛を起こしてしまい、現地の住民に教えてもらった診断所へと向かい、年老いた医者に診断してもらっていたのだが、途中で意識を失い、気が付けばあなたは青ざめた血を輸血され狩人になっていた。不幸中の幸いとして腹痛は治っていたが。

青ざめた血を輸血され狩人になった後、いつの間にか獣に支配されたヤーナム街を観光し、なんか目の前に現れた自称上位者の月の魔物と出会い、面白そうだったから肩を組んで写真を撮った後、即屠(ほふ)り、あなたは上位者となり幼年期を迎えた。

しかし姿は変わらず人のままであった。

それもそのはず、あなたはまだ年老いた獣をこの世から消していないからだ。取り敢えず、観光名所を回りながら視界に入ったモノ、全てを狩っていった。人も獣も上位者も。だが、それでも足りない。

獣狩りを全うせよ。あなたをヤーナム街の住民にし、狩人に仕立て上げたトチ狂った獣を見つけ次第、泣こうが喚こうが命乞いをしようとも慈悲を与えず、永遠の苦痛を与えるのだ。

さて。そんなあなたの今日の予定は知り合いの狩人にちょっと手伝いが欲しい(サンドバッグになってくれ)とお願いをしたところ、全力で逃げ出した為、現在廃城カインハーストにて鬼ごっこの真っ最中だ。

何故逃げ出したのかあなたは理解出来なかったが、段々と楽しくなってきたので、偶にはこういうひと時も良いなと感じた。知り合いの狩人は涙目になりながら神にも縋る思いで助けを求めているが。

それはそうと、あなたと知り合いの狩人は気が付けばカインハース

トの最上階まで上り詰めると、いよいよ距離が縮まっていき、僅か1メートルまで追い詰め、屋根から屋根へ乗り移った瞬間、あなたは雪で足が滑り、顔から強打するや否やそのまま屋根から転げ落ちてしまった。

まさかこんなドジをすると思わなかったあなたは恥ずかしくなったが戻り次第、速攻で取っ捕まえれば良いかと目を閉じ呑気に考えながら落下していた。

あなたはこのまま背中から地面に叩き付けられるかと思われたが次の瞬間、バシャンと水飛沫(みずしぶき)をあげながら水中へと沈んでいった。

はて。カインハーストに池や湖などあったただろうか？

仮にあったとしてもカインハーストは凍える程の気候だ。水など凍っているだろう。となると考えられるのは、あなたはまた未探索(新DLC)の地に飛ばされたのだ。

幸いにも底は浅かった為、溺れることはなかったが、服が水浸しになってしまった。しかも処刑隊の服を着ていたので服が水を吸い、重くなっていた。あなたは陸地に上がると処刑隊から狩人の服へと着替え、あたりを見回した。

空は快晴で太陽が登っており、風に吹かれ木々が揺れ、あなたの落ちた場所には湖が太陽を映していた。

さて、どうしたものかとあなたは考えていると背後から枝が折れる音が聞こえてきた。

反射的に獣狩りの鉈と短銃を取り出したあなたは前転し、背後に忍び寄る獣に向け短銃を構えた。

「あなた、だれ？」

そこに居たのは、白いワンピースを着て麦わらの帽子を被った少女だった。雲のように白い白髪が帽子から見え隠れしており、顔立ちはまた幼さがあるように見える。ふと気が付くと少女の手には細長い

棒切れが握られていた。
あなたは一先ず自分は旅人であることを話した。嘘であるが。
「これ？お魚を釣ろうと思って・・・ おじさまも一緒にやりませんか？」
魚・・・ 魚人・・・ 漁村・・・ ゴースの遺子・・・
うっ頭が。危うく発狂しかけたが何とか踏み止まり、取り敢えず釣りなるものをやってみようと思い頷いた。少女の話をザックリと聞く限り、その細長い棒切れもとい釣竿で釣るらしい。
これを聞いたあなたは酷く驚いた。なにせ、この今にも折れそうな細長い棒切れで魚人が釣れるのだから。成る程、そういうのもあるのか。
これが終わったら後で試してみよう。
あなたは間違った知識を学びながら少女の言う釣り場までやってくると、釣竿を垂らした。これで後は魚人がかかるのを待つだけだ。
そう思いながらボーッとしていると肩を叩かれ、横を見ると少女が困惑していた。何故だ。
「え、えっとおじさま。釣竿に釣り糸を巻いて、釣り針付けてお魚のご飯を付けないとダメですよ」
・・・・・・・・・・。
何やかんやあって2時間後
「わっ、また釣れた」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

少女の釣竿がまた反応し引き上げてみると、ビチビチと元気よく跳ねる魚が掛かっていた。これで八匹目だ。
え？あなたは釣れたのか？・・・・それはさておき、一向に反応しない釣竿に苛立ち始めたあなたは釣竿を置くと銃槍を取り出し、持ち手に釣り糸を括り付けるや否や、水面に映る魚目掛け、勢い良く投擲した。投げた銃槍を先程括り付けた釣り糸で巻き上げて見ると銃槍の先端に魚が刺さっていた。
最初からこうした方が早かったな。そう思いながらもう一度やろうとしたが

「おじさま、わたし怒るよ」

幼さが残っていたとは思えない程の般若顔になった少女にあなたは土下座した。久しぶりに少しチビってしまった、恐らく初見マリア戦以来だろう。
その後、１０分ほど説教をされたあなたは罰として少女と一緒に釣れた魚を焼いて食べることになったのだが。

「おじさま。私、お魚の鱗取りをお願いしたのに何故鱗どころか魚肉まで落としてるんですか？」
「おじさま。私、火を起こしてくださいとお願いしたのに何故おじさまが燃えているのですか？というか早く消火してください！」

まるで役に立たなかった。だが待ってほしい。これは仕方ない、そう仕方ないのだ。何故ならあなたは上位者だ。鱗を取ろうにも鱗と一緒に魚肉も取ってしまうし、火を起こそうにも自ら火に成れば良いのではと思い、全て良かれと思ってやったことだ。前者に関しては力加減が出来ていないだけだが。
だからあなたは悪くないのだ。何もかもタイミングが悪く、考えがすれ違っていただけだと少女に説明した。

「は？」

幼さが残る少女の声とは思えない程のドスが効いた声が聞こえ、汚物を見る様な目で見られた。怖い。人形ちゃん助けて。

「おじさま、串をお魚にこういう風に刺していてください。

く れ ぐ れ も変なことはしないでください」

年端もいってない少女に怒られてる上位者がいるらしい。誰だろうな（）

「聞いてますか？ お じ さ ま ？」

御免なさい許してください般若顔はやめてくださいチビってしまいます。

その後、何とか出来た料理を少女と一緒に美味しく頂いた。初めて食べた川魚の塩焼きと言う料理は何故か塩辛く感じた。

第１０話　上位者からの贈り物

あなたは街中（ヤーナム）を歩けば普通にいる狩人だ。
暇が有れば、後輩の狩人と共に地底を潜り、
ある時は、知り合いの狩人に殺し殺され、またある時は星の娘（なお星の娘は嫌っている模様）にスケベしに行ったりする極々普通の狩人だ。
山へ芝刈りに行った筈が何故かヤーナムに訪れてしまい、不運にも黒塗りの馬車に轢かれあなたは指に深く棘が刺さってしまい、黒塗りの馬車に乗っていたヤマオカという人物に教えてもらった診断所へと向かい、年老いているが眼光が鋭い医者に診断してもらっていたのだが、途中で意識を失い、気が付けばあなたは青ざめた血を輸血され狩人になっていた。因みに棘は刺さりっぱなしだった。
青ざめた血を輸血され狩人になった後、何故か獣に支配されていたヤーナム街を歩き回り、突然目の前に現れた自称上位者の月の魔物と出会い、大胆な告白をされたが（お前の事が好き♡）、あなたはタイプではなかったので（俺は嫌い♡）、瞬殺して上位者となり幼年期を迎えた。
しかし姿は変わらず人のままであった。
それもそのはず、あなたはまだ年老いた鋭い眼光を持つ獣をこの世から抹消していないからだ。取り敢えず、適当に歩き回りながら視界に入ったモノ、全てを狩っていった。人も獣も上位者も。だが、それでも足りない。
獣狩りを全うせよ。あなたを治療せず、狩人に仕立て上げたトチ狂った獣を見つけ次第、泣こうが喚こうが命乞いをしようとも慈悲を与えず、永遠の苦痛を与えるのだ。
さて、そんなあなたは狩人の夢にて知り合いの狩人そして後輩の狩人、人形ちゃんと一緒にお茶会をしていた。
最初は、他愛のない世間話をしていたが後輩狩人のある言葉で花を咲かせていた。

「くりすます?」
「そうっすよ!もう直ぐクリスマスっすよ!先輩方はどうするんですか?」
「どうって・・・・ なあ?」

あなたをチラリと見たサンドバッg・・・・ 知り合い狩人は後輩の返答に困っていた。

ーーーそもそもの話、くりすます?なるものは一体何なのだろうか??
「えっ、先輩方知らないんですか?・・・・ いやいや、流石に冗談っすよね??」
「・・・・・・」
ーーーー・・・・・・。
「あっ・・・・・ スゥ――――・・・・ え、えっとですね、クリスマスっていうのは」

後輩狩人曰く、いえす=きりすと?という上位者の誕生を祝うお祭りのようで、その誕生の前日にさんたくろーす?なる者が煙突から侵入し子供達への贈り物を何故か靴下に入れるそうだ。

ーーー何故靴下に贈り物を入れるんだ?血に酔っているのか?
「あー、それは俺も思ったわ。てか、勝手に許可なく侵入すんのは駄目だろ」
ーーー全くだな。
「お前が言うな」
ーーーお?殺んのか??(ギャリリリリィィィッッ!!)
「先輩、回転ノコギリ仕舞ってください。サンドバッg・・・・ 貴方も落葉仕舞ってくださいよ」
「おい、今サンドバッグって言い掛けたか?」(ガキィィィンッッ!!)
「変形してないで、はよ仕舞えやサンドバッグ」(気の所為ですよ)

「最近後輩が冷たい」

その後、色々話が脱線したり殺し合いに発展したが後輩狩人の頑張りもあり、なんとか話の軌道修正しつつ、あなたが連れてきた子達へ贈り物をしないかという話に落ち着いた。

「うーん、贈り物ねぇ…… 何が良いんだ？」

「ゼェゼェゼェ…… せ、先輩は、心当たりとか、オエッ、ないんすか？」

ーーー・・・・あるにはある。

「マジか！じゃあそれ用意してやれば良いな!!」

「ンンッ…… それでどんな物なんすか？」

ーーーくま？という人形が欲しいらしい。

「「くま？」」

なんだそれは？と言わんばかりの予想通りの反応をされ、あなたはポーチからくま？なるものを描いた紙を2人に見せた。

「ほーん、下水豚が毛むくじゃらになった感じか？」

「いや聖ケモ君を四足歩行にした感じじゃないっすかね？」

「取り敢えず、1つはこれで良いとして…… 後は盲目の嬢ちゃんか？」

「？ いや、そもそもこれはどの子が欲しいものなんすか？というか用意するのは3人分すよね？」

ーーー勿論、因みにそれが欲しいのは使者くんと今裏手で花冠作ってる少女だ。

「あー、あの子すか！綺麗な花冠作ってる」

「ちょっと待て、俺その嬢ちゃん知らないんだが」

「え？」

ーーー・・・・・・。

あなたはそういえば知り合い狩人に伝えていなかったのを思い出した。
だがしょうがない。
この世に完璧な狩人なんでいないのだから。

「・・・・その話は後で聞くとして、他は当てあるのか？」
ーーー絵を描く画材が欲しいのと・・・・。
「絵描きの子っすね、それならビルゲンワースで盗ｎ・・・・ 拾ったのがあるんでそれ渡しますよ！」
「今盗んだって言わなかったか？」
「あ？あ??」（気の所為ですよ）
「後輩が怖い」
「ゴホン・・・・ もう１人は・・・ 盲目の子っすかね？何が欲しいんです？」
ーーー・・・・いや、それなんだが。

しかしあなたは言い淀んだ。ハッキリ言って裸で１００周目マリア様を初期レベで攻略するような物だ。いや、そっちの方がまだマシかもしれない。あなたは２人に伝えれる訳がなかった。だが。

「おいおい、どうした？言いにくいのか??」
「大丈夫っすよ！自分達も手伝いますから!!」

彼らは知らなかった。まさか盲目の少女が他よりも強欲だったことを。
彼らは知らなかった。これが地獄の始まりだったことを。

ーーー本当に良いんだな？
「「勿論」」
ーーー　言　っ　た　な　？

そうしてあなたは重く閉ざされた口を開いた。

ーーー・・・・放射型　呪われた血質の濡結晶＋３２．６％。

「・・・・・・・」

ーーー・・・・・・。

「こん畜生がぁぁぁぁぁ!!!」
「おいゴラァ！結晶見せろ!!あ？２５．２％？クソがぁぁぁぁぁ!!!」
ーーーおい銃デブ！逃げるな!!結晶置いてけ！良し！そうだ！結晶置いてけ!!……　全ステマイを出すなぁぁぁぁ!!!

あれから地底を潜り続けて周回することｎ万回経つが未だなお３０％を超えるものは出て来なかった。貯蔵していた輸血液も水銀弾も、武器の耐久力、精神が擦り減っていく一方だった。
もう諦めても良いんじゃないか。
俺達は頑張った。
もう良いじゃないか。
そう悪魔の囁き(妥協)が聞こえてくる。
もう……　良いじゃないか。
だが、後輩狩人が待ったをかけた。

「本当に良いんですか……　あの子達の笑顔を見れなくても」
「・・・・いや、そもそも無理だろう。あれから何日経った？もうそろそろクリスマスに差し掛かるぞ。間に合うのか？」
ーーー其奴の言う通りだ。ここで妥協するのｍ
「フンッッ!!!」（バキィッ!!）
ーーーぶべらッ!?
「ちょっ!?こ、後輩？」
「何、弱音を吐いてるんですか……　保護者であるあなたがそんなことを言って良いのか!?」
「お前そんなキャラだったか後輩？」
ーーー・・・・そう、だな。私が諦めてどうする……　！
「お前らマジで大丈夫？え？何？なんで熱血スポ根状態なの??」
「さあ、出るまでやりましょう……　覚悟は出来ていますか？自分は出

来てます・・・・　！」

ーーーやってみせるぞ、後輩・・・　！

「なんとでもなる筈っす!!」

「お前ら少し休憩しないｋ・・・「は？」アッナンデモナイデス」

閑話休題（鳴らない言葉をもう一度描いて～♪）

ーーーやった・・・　私はやったんだあァァァァァッッ!!ヒャハハハハハハァァッ!!!

「繧？･j縺セ縺励◆縺ュ蜈郁シュ！」

「モウオウチカエリタイ・・・」

あなた達はようやく御目当ての放射型　呪われた血質の濡結晶＋３２．６％を手に入れた。

長く険しい戦いであったが少女の笑顔の為ならば苦では・・・・　いや、苦ではあったが乗り越えることが出来た。

失ったものが多かったが。

ーーーさあ、くりすますの準備をしようではないか貴公ら！この私に続けッ!!

「莠？･ァ」!!

「いやマジで休ませてくれ、なんで元気なんだお前ら・・・　つーか後輩に至っては言語が理解出来ねぇし・・・　この化け物共が」

「縺カ縺」縺ｨ縺ー縺励◡縺吶ｈ繧ｵ繝ｳ繝峨ｷ繝？げ」

「何言ってるか分からんが馬鹿にされてるのは分かったわ」

こうして彼らの地獄の地底周回マラソンは終わりを告げた。刻々とクリスマスの日は近付いている。急いで準備をしなければ。

「全く、いきなり呼ばれたと思ったら裏手で待たせるとは何がしたいんさね彼奴らは」
「さてな。俺の知ったことじゃない」
「何かあるんですかねお師匠様」
「さてねぇ…… 碌なことじゃなければいいがね」
「アイリーンおばちゃん、見て！」
「へえ、上手く出来ているじゃないか」
「えへへ／／／」
「デュラおじさん、どうかな？」
「ん？おお、上手いもんだ。良く描けてる」
「／／／……」

突然やってきたあなたに狩人の夢に連れられるや否や裏手で少し待ってほしいと言われ、少女達の面倒を見ていた鴉羽の狩人アイリーンと古狩人デュラは今度は何をしでかそうとしているのか考えていた。

（この子達に変なことしようならば、あたしが全力で守らないといけないさね）
（この子達に変な真似しようならば、俺が命を賭してでも守らねばな）

そう思われても無理はない。
何故なら立派な狩人に仕立てあげようと少女達に下水の豚をモツ抜きさせようとしていたのだから。

なおそれを知ったアイリーンとデュラは目にも止まらぬ速さで赴き、下水の豚を屠った後あなたをしばき回した。

「お師匠様？どうかされましたか？」
「いや・・・・ なんでもないさね」
「？ そうですか？」
「・・・・リリィ、何かあったら私の代わりにこの子達を守ってやりな」
「はぁ・・・・ やはり何か起きるのですか？」
「あのトチ狂った奴の事だ。何か無い方がおかしいさね。それにお前はあたしがいなくても、もう1人で獣を狩れるようになった。いいかい？」
「・・・・はい、お師匠様」
「なんだいそんな顔して？怖いのかい??」

そう言い、盲目の少女・・・・ リリィを優しく撫でた。アイリーンの元ですくすくと育っていった少女は今や立派な狩人へと変貌を遂げ、アイリーンと共に獣狩りの毎日をおくっていた。
そして少女・・・・ リリィもまた、アイリーンを時に厳しく、時に愛してくれる母親兼師匠と思うようになった。

「んっ・・・・ まだ、少し怖いです」
「ふふっ、そうかい。まだまだ親離れは出来なそうさねぇ」
「・・・・・・・」
「・・・・なんだい？言いたいことがあるなら言いな。発言次第ではあんたの首が飛ぶがね」
「いや・・・・ 何でもない」
「・・・・・・」
「なんだラナ？・・・・・ 頭を突き出してどうした？」
「・・・・・絵、上手く描けた」
「お、おお・・・・ そうだな」
「・・・・・・ん」

「？」
「・・・・撫でて欲しいぐらい分からないのかねあんたは」
「ああ・・・・ そういうことか」

アイリーンに指摘され、やっと分かったデュラは絵描きの少女・・・・ラナをそっと撫でた。
あなたにいきなり会うや否や連れて来た少女の面倒を見てくれと頼み込まれ、断ったものの少女を置いて帰ってしまい仕方なく・・・・本当に仕方なく面倒を見ていたが、いつしか父性が芽生え、気付けばまるで自分の子のように振舞っていた。
絵描きの少女・・・・ ラナもまた『元』両親のように道具のように扱われることもなく・・・・ それどころか『元』両親以上に愛してくれるデュラに最初は警戒していたが段々と心を開いていった。今では『本当』の親子のように。

「んっ・・・・ えへへ／／／」
「俺の娘が可愛い」（何が可笑しい？）
「言ってることが逆だよ、親バカ」
「そう言うアンタもだろ、お師匠さんよぉ」

片や親バカ、片や師匠兼親バカが睨み合う。すると人影が間に割って入った。
「皆様方、準備が出来ましたので此方へお越し下さい」

人影の正体は、いつの間にか居た人形だった。だが、唯の人形ではなかった。
紅く煌びやかなドレスを着た、人形が。
「・・・・なん、だい？その格好は？」
「何でも今日は特別な日の事なので狩人様から、このようなお召し物

を頂きました。如何でしょうか？」
「・・・・いや、どうって、そりゃあ」

アイリーンとデュラは、どう返答すればいいのか困っていた。最初に言っておくが今の人形の姿は似合っている・・・・ いや、似合い過ぎている。
人ならざる肌が更に煌びやかに見え、美しくも表現し難くもあった。
無論少女達も人形に見惚れ、声を出すことが出来なかった。仮に出せたとしてもこの言葉だけだろう。

「・・・・・きれい」
「ふふっ、有難う御座いますラナ様」
「・・・・あーっと、それで準備出来たってのは？」
「ええ、此方です。どうぞ、お進み下さい」

人形に促され、裏手から出ると至る所にランタンが吊るされ、丸い玉から星の形をした色んな血結晶の装飾が施されていた。
だが、真っ先に目に映ったのはーーー

「なんだい、この悪趣味をこれでもかと詰め込んだ木は」
（・・・・何故木の天辺に金のアルデオがあるんだ？）

館ほどの大きさはないがデスサンタ1．５人分ぐらいの木が立っていたが、何とも形容し難い雰囲気を纏っていた。
それもそのはず、なにせ上位者の叡智や死血、真珠ナメクジ、レッドゼリー、血走った目玉など・・・・ 悪意しか感じられない装飾が施されていたのだ。

「ハァ・・・・ やはり碌なこと･j」

アイリーンが頭に手を当て呟こうとしたその時

ＢＯＯＯＯＯＯＯＭ!!!

爆発音が響き渡った。

それが聞こえた瞬間、アイリーンとデュラは少女達を後ろに隠れさせ庇うように辺りを見回した。

すると館の奥からコツコツと此方に歩み寄ってくる足音が聞こえてきた。

アイリーンは慈悲の刃を、デュラはパイルハンマーを取り出し臨戦態勢に入った。

また後ろにいるリリィも仕込み杖を構えた。

そして現れたのはーーー

「「メリークリスマス!!」」

聖歌隊の格好をした男２人と

ーーーめりーくりすます!!

何故か赤く変色している処刑隊の格好をしたあなただった。片手に大砲を携えた。

「今度からもう少しマシなやり方をしな。次はないよ」
「貴公らの気持ちは分からなくもないが・・・・ やり過ぎだ」
「「はい・・・・・」」
ーーー申し訳ない・・・・・・。

少女達の目の前で正座して説教される野郎共は全て善意で・・・・ サプライズの為に行ったのだが、いかんせんやり過ぎた。
なお、少女達はなんとも言えない目で見ていた。

「それで？今日がそのなんだい？くりすますって日で、子供に贈り物を渡す日なんだって？」
「そ、そうっす・・・・ それで先輩がサンタ役を」
「・・・・・・」（匂いがいつもと違うのは気の所為か？）
「・・・・・贈り物は全員分あるのかい？」
「も、もちろんですよ・・・・」
「・・・・・・変な物じゃないだろうねぇ？」
ーーー断じて変な物を渡す気はない。
「・・・その言葉、信じるよ」

アイリーンの説得に成功したあなた達は箱をリボンで補装した贈り物を少女達に一人一人手渡していった。
1人目はあなたの狩人の夢に迷い込んだ少女・・・・ ミーシャに贈り物を渡した。
ミーシャはあなたがいない時に館の掃除や花に水やりなどを人形ちゃんや使者くん達と代わりにやってくれており、あなたが帰ってくると人形ちゃんと共にお迎えしてくれる・・・・ 今や人形ちゃんと同じ程、愛していた。

ーーーメリークリスマス、ミーシャ。
「わたしに？あけてもいい？」
ーーー構わないとも。

箱を受け取るとすぐさまリボンを解き、蓋を開けた。箱の中にはωの口をしたクリクリお目目の茶色い動物の人形だった。
実はこの人形は知り合い狩人の旧友の地底人が作った物だ。知り合い狩人曰く、手先が器用かつ想像よりも完璧に作る職人気質だった。その結果、納得以上の物が手に入った。因みに代金は聖杯で払った。

「わあー！くまさんだー！ありがとう!!」
ーーー喜んでくれてなによりだ。

あなたはミーシャが喜んでホッとした。なんせくま？という獣が分からなかった。だが、それはもはや気の過ぎたことだ。早く忘れるようにしよう。

ーーーさて次は、ラナ。君だ。
「私？」
ーーーメリークリスマス、ラナ。

そう言い、先程とは少し大きい箱を渡そうとするが横槍が入った。
「待て、貴公。先に私が確認しても構わないか？」
ーーー何の為に包装したと思っている。彼女達の為に中が分からないようにしたのだぞ？
「だからこそ、変な物が入ってそうなのだ」
ーーー私が信じられないと？

あなたとデュラの間に一触即発の雰囲気が包み込んだが僅かたっ

た一瞬であった。

「これ・・・　欲しかった筆とキャンパスだ」

声を聞いた２人はバッと横を振り向くと、いつの間にか箱を開けていたラナの姿だった。

２人の視線に気付いたラナは贈り物を置き駆け寄った。

「おじさん！ありがとう!!」

ーーー気に入ってくれてなによりだ。

「・・・・疑ってすまない貴公」

ーーー・・・・構わないさ。この事は水に流そう。

「・・・・そう言ってくれると助かる」

ーーー最後はリリィ。君の番だ。

「えっ・・・・」

リリィは困惑の表情を浮かべるがあなたはお構いなしに近付き、それまでとはかなり小さい箱を手渡した。

「これまた小さいねぇ・・・　髪飾りか何かかい？」

ーーー開けてみれば分かるさ。

「は、はい・・・・・　ッ！これは・・・・　!?」

「どれどれ・・・・　血の攻撃力＋３２．６％!?はあっ!!?あんたコイツを何処で!!??」

ーーー気に入ってくれたかな？其れを語るには我々の苦渋を話す事になるが。

やはりというか想像通りの反応だ。

こうなってもおかしくはない。

なにせドロップ率０．００１８６８％で入手出来るもはや伝説とも呼べる代物だ。驚かれても致し方あるまい。

しかしあなたは何か引っかかった。
もっと喜び嬉しくなってもおかしい筈だが。

ーーーどうだ？気に入ってくれたかな？
「あ、あの、私……

技神なのでどうすればいいのか分からなくて」

瞬間、その場が凍り付いた。
今、この少女は、何と、言った？

「い、いやいや……　待ってくれ嬢ちゃん」
「ききき聞き間違いかな？いいいい今技神って聞こえたんだけど????」
「あの……　私技神です、その……　ごめんなさい」
ーーーー……スゥーーーー……。

次回、地獄の地底再攻略開始。

なお後日、知り合い狩人と後輩狩人に殺意ＭＡＸで追われた模様。

是非もないよネ!!

番外編　ある2人の少女の未来

暗闇から光へ咲く花

満月が照らす古びた墓地に1人の幼なさ
を感じさせる女性が真新しく作られた墓に
跪き、祈りを捧げていた。
その祈る手に鴉の狩人証を
優しく・・・ 愛おしく握って。
女性の脳裏には大切で・・・
忘れる事はない思い出が甦る。
血の繋がりは無くとも母として愛し、
時には自身の師として狩りを教授してくれた
鴉を彷彿とさせる1人の女狩人を。
ある時は厳しく・・・ そして優しく家族として
迎えてくれた大切な人との別れは
前の家族なら悲しむことはなかっただろう。
しかし幼なさを残した女性の包帯で隠された目から
一雫の涙が溢れ落ちた。
その姿からどれほど女狩人を
尊敬し・・・ 愛していたのかが分かる。
幼なさを残した女性は溢れた涙を拭うと祈りをやめ、女狩人から譲
り受けた嘴(くちばし)の仮面を着けた。
悲しむのはこれで終わり。
これ以上、心配させてはならない様に。

「行って来ます、師匠」

そう言うと女性は立ち上がり、

その場から立ち去ろうと身を翻す。
ふと何処からか声が聞こえた。

――――――――――――――――あんたなら大丈夫だ、頑張りな

その声は幻聴だったかもしれない。
ただの思い過ごしかもしれない。
されど、その声は優しかった。
まるで独り立ちをする子を送り出す親のように。

「ッ……はい！」

そして女性は…
新たな鴉羽の狩人は歩き出す、新たな道を。
その道は辛く険しいかもしれない。
だが、大丈夫だろう。
想いは受け継がれていくのだから。
それに1人ではないのだから。

私は昔の様に守られる存在ではなく
誰かを守る存在になりたい。
そして願わくばーーー
ーーー師匠に追い付きたい。

此処に新たな鴉羽の狩人が誕生した。

わたしの物語はここでおしまい／此処から私の物語

辺りが焼け落ち、煤まみれとなった場所には
真新しい墓標と1人の少女・・・　否、女性が立っていた。
女性の右手にはとある古狩人の愛用していた狩人武器を手に持っていた。無論、身につけている服も
とある古狩人から受け継いだ狩装束を。
女性の表情は悲哀が・・・　哀愁と覚悟を感じる。
狩装束から見える肌からは
所々痛々しい傷跡が覗かせる。
まるでこの日の為に特訓をし続けて来たかの様に。
女性は墓標にそっと触れ、優しく撫でた。
自身の心配はいらないと・・・
墓の下に眠る人に安心させる様に。
もう私は大丈夫だと・・・　心配せずに安心して
眠っていて欲しいと言うように。
一瞬、目を閉じると女性はそこから離れていった。
もはや元は金を稼ぐ為の道具だった少女の面影はなく、其処には使命を受け継ぐ覚悟を決めた女性の姿だった。
私の道は私が選ぶ。
誰がなんと言おうとも、
たとえそれが間違っていたとしても。
私は、古狩人デュラの意志を継ぐ。
だからーーー
ーーー見守っていてね、父さん。

この日、ヤーナムに新たな狩人が誕生した。
そして皆々は口を揃えて、こう言うだろう
その姿はまるでとある古狩人を彷彿させると。